

『独逸語学講話』 著者 関口存男
発行所 日光書院 昭和 14 年 6 月 7 日発行
昭和 15 年 11 月 25 日再版
昭和 17 年 2 月 12 日三版

再帰的表現と Existenz の解釈 (Seite 251 - 316)

第一講

in sich とか an sich とか aus sich とか云った様な句が、単に哲学じみた理屈を云う場合のみならず、普通のドイツ語の中でも頻々として用いられ、しかもそれらがドイツ語の難関を成している事には誰でも気がつきます。

文法書で直ぐ例語として引用する所謂再帰代名詞や再帰動詞という奴は、『ドイツ人は一たい此の sich という語を頭の中でどう云う風に考えているのだろうか?』などと云う微妙な不審が余り生じないように、わざわざ解り易い場合のみを選び出して引用するのが恒例になっているようですが、実物のドイツ語は、燻製や缶詰とは訳が違うから、そう都合よくなっていない。或種の場合には、どうしても『一たいどう云う風に考えてこんな変な事を云うのだろうか?』と云う不審が当然起って来なければならない。殊に sich の場合には其の点が案外重要になって来ます。

本稿は sich を用いた諸種の語法を研究し、重要な熟語にも触れ、同時に西洋人に共通な『己れ自身』と云う物の考えかたの深い意味を研究しながら、彼らの精神文明に、謂わば『再帰哲学』と云う特徴づけを行おうという、多少大それた企です。-----それから、一たい斯うした研究というものは、漠然たる抽象論になり勝ちなものですから、既にそれを防止せんがためにも、常に具体的な表現の実例を眼中に置いて考察を進める必要があります。それ故、本稿は、抽象論を述べる前には必ず一つの Kontext (典拠) を前に掲げて、それから出立して論に入ることに致します。

Er ist tot Georg ist tot. Stirb, Götz Du hast dich selbst überlebt,
die Edeln überlebt. (Goethe : Götz v. Berl. V.)
彼は死んだ-----ゲオルクは死んだ。-----ゲッツよ死ね-----
そなたは死に遅れたぞ、此の健気な者供に死に遅れたぞ。

überleben と云うのは、über ~ hinaus leben の意で、つまり『云々を過ぎて尚お其の後にまでも生き残る』ことで、それをどう云う風に用いるかは、かなり自由です。たとえば、戦争の惨禍を通過して、一時は砲弾とタンクのために徹底的に叩きのめされ踏み蹂られながら、その次の平和の春には又青々と芽を吹いた森があったら、Das Gehölz hat den Krieg überlebt と云うでしょう。また、此の患者は心臓が弱いから、手術をすると死ぬかも知れぬ、といったような場合には、Der Patient wird die Operation nicht überleben と云うでしょう。従って、自分が刑事問題に引っ掛かって新聞に写真や名前が出た日には、国の親父が自殺するかも知れぬ、と云ったような時にも、Das wird mein Alter bestimmt nicht überleben と云うでしょう。また少し様子の違った場合で云うならば、孫も死に子も死んでしまったのに、祖父だけがピンピンして百二十歳まで生きているのなら : Er hat alle seine Kinder, ja sogar Kindeskind überlebt と云うでしょう。これは überdauern と云います。

では表題の文の sich selbst überleben はどうかと云うに、以上の例から考えて『自分自身が死んだのに、まだ自分自身が生き残っている』と考えて見ればよくわかります。(或いはよくわかりませんか? 問題は此処です)。自分が死んで自分が生きていると云う

と論理的に齟齬があるようですが、解り易く云うならば、第一の自分と第二の自分とは多少違った意味の自分を指しているのので、『武士としてのゲッツが死んだのに、形骸としてのゲッツが死におくれて不覚を取っている』ということです。死ぬ可き時に死ななかつた、死ばをのがした、生き恥を曝している、の意です。

また、従って、『流行おくれになる』とか、『時勢に取り残されて世に残骸を曝す』等の意味に用いても好い。

Lessing ist neben Friedrich dem Großen und Kant einer von den wenigen Vertretern der damaligen Jugend, die, über den geistigen Horizont ihrer Zeit weit hinauswachsend, von dem Verhängnis, sich selbst zu überleben, unberührt blieben. (Rud. Unger : Hamann u. d. Aufklärung)

また、それらとは全然反対な事実、即ち肉体としての自分は死んだが、名は後世に残るとか、業績は死後に伝わる、とか云うのを *sich überleben* と考えても好い。

Solches Scheiden heiße nichts sterben :	かかる最期は死に非ず、
Denn er lebe im Angedenken,	そは追憶の裡に生き、
Lebt in seines Wirkens Früchten,	わが働きの甲斐に生き、
Lebt in seiner Kinder Taten,	子々孫々の業に生き、
Lebt in seiner Kinder Mund.	語り伝えに生くればなり。
O, es ist so schön, beim Scheiden	佳き哉、此世のいやはてに
Seines Wirkens ausgestreuten Samen	播きたる種の行末を
Lieben Händen zu vertrauen,	いとしき者に委ぬれば、
Die der Pflanzesorglich walten,	彼等も之れを培[つちか]いて、
Und die späte Frucht genießen,	末は善果を味わいつ、
Im Genusse doppelt fühlend,	善果にこもるたらちねの
Den Genuß und das Geschenk.	恵みのほどを憶うべし。
O, es ist so süß, so labend,	心よきかな、愉しきかな、
Das, was uns die Väter gaben,	父祖伝来の美祿をば
Seinen Kindern hinzugeben	わが児に遺し伝えつつ
Und <u>sich selbst zu überleben!</u>	われ亡き後の我れたらしむは！
(Grillparzer : Die Ahnfrau, I.)	

Der Nemophylax hatte die Musik dazu gemacht, und, wie er seinen Freunden ziemlich laut ins Ohr sagte, diesmal sich selbst übertreffen. (Wieland : Die Abderiten)

作曲の方はネモフュラックス氏の手になったもので、御本人が相当大きな声で知人たちに耳打ちして披露なされたところによると、こんどこそは、御自身の作品中にすら例を見ないほどの傑作が出来たのだそうである。

sich selbst übertreffen (自分自身を凌駕する)というのは、いつもの自分よりも、こんどの自分の方が勝った、という意味です。けれども、実際の応用場所を考えて見ると、此の文句は多種多様な潤色を帯びる可能性をもっています。即ち、あるときには『自分にしては上出来だった。』という意味にも用いられる。そうすると、自分で自分を褒めているのか貶しているのか一寸判明しない。現在の自分は褒められているが、今までの自分は多少貶されている。悪くすると、ある一瞬間の偶然の自分が褒められ、恒常的な、本質的な自分の方はひどく見下げられたことになるかも知れない。

いずれにしろ-----茲が *sich* なるものの言語現象としての面白いところであり、またこれからの主題とせんとする点であります-----主題と、その再帰代名詞 *sich* とは、厳密に云うと、同一者を指してはいない。両者が同じものを指すというのは、それは単

なる文法上の関係であって、詳しく考えて見ると、主語と再帰代名詞とは同一物ではない。もし同一物であったら、**sich selbst überleben** とか **sich selbst übertreffen** とかいうことは論理に矛盾がある。「ぼく自身とぼく自身とはどっちが偉いか？」という問いに対し「それは勿論ぼく自身の方が偉い」と答えるなんて事は完全な **Unsinn** でなければならない。『おれ自身とおれ自身と、どっちが先に死ぬか？』という問いは、問そのものが『それはおれ自身の方が遙かに先に死ぬさ』という答と同様の程度に於てトンチンカンでなければならぬ。

こう考えて来ると、**sich** を用いた或種の言い廻しは、厳密に云うと少し-----じゃない大いに論理的インチキがあるので、再帰語法の如くにして実は然らず、つまり単に再帰という形式を借りた他の何者かでなければならぬ。再帰を掲げて狗肉を売っている。

けれども、言語の生命は単なる論理にあるのではなくて、或場合にはむしろ論理に合わない考え方をする事それ自身が言葉の魅力を成すものですから、以上のような文句は、まあそういう所をねらったものだと思つてよろしい。-----けれども、こうした再帰的語法は、表現の面白さのために、動もすると濫用される傾向があつて、哲学の方などでは、主語と再帰代名詞とを用いて、とんでもない「構造」(時には虚構)を拵え上げる。**Fichte** の汎自我論などは "**Ich setze mich**" (私は座るではなくて、『我れ我自身を据ゆ』又は『我れ我自身を設[もう]く』)を以て実在の根本と道破しているが、この場合は主語 **ich** と対象 **ich** とが全然同一者と考へなければならぬが故に、考へるものの頭の中には、何と云つて好いかわからないような、ビックリとも当惑とも感激とも判然としない或種の混乱が捲き起るでしょう。またそれが **Fichte** 哲学の正体でもあると思ひます。

また、もっとややこしいのになると、**Martin Heidegger** は、人間の存在、即ち個人の意識を中心として見たわれわれ人間世界というものの根本を成す『からくり仕掛』を、かれ独自の三本柱をピシッと喰ひ合わせて次のように組み立てている：**Sich vorweg schon sein in einer Welt bei innerweltlich belegendem Seienden.** ---**Heidegger** を知らない人には勿論何の事だかわかる筈はない。けれども、これだけの文句をよく覚えていて、この文句の説明を一言一句聴取せんとする心構えを以て、彼の主著 **Sein und Zeit** を読んで行けば、いずれはわかる事受け合いです。問題は此の **sich vorweg** (己自身に先んじ離れて)という一句ですが、此の場合は、主語として考へられる自我と、**sich** によって意味されている自我とは、**Heidegger** の考へとしては全然別物です。また別物であればこそ **vorweg** という事が云い得るのであり、また、別物だと区別を立てて関係を明らかにしたところに **Heidegger** のシステムがあるのであります。

Heidegger の考へ方によると、自我というものが、本来の自我 (**das eigentliche Selbst**) と、本来ならざる自我 (**das uneigentliche Selbst** 又は **das Man-Selbst**) とに分れる。すると、**sich vorweg** に於ては、**sich** によって指されているのは一体どっちかと云う疑問が当然起つて来なければならぬ。同時に **sich** は、その主語と考へさせるから、では主語の方は **sich** とはちがった自我を指すであろうという事は当然考へられる。

その問題は、**Heidegger** の論旨を知る人は、その次の **schon sein in einer Welt** 云々から考へれば当然判明する如く、**sich** によって指されているのが本来の自己であつて、**sein** という不定法の主語として考へられる方が(即ち文の主語は)**das Man-Selbst** を指すであろう事は明白です。

即ち、一言以て断ずるならば、**Heidegger** は、ドイツ語(ばかりではない、凡ゆるヨーロッパ語)に特有なる『再帰的という言語現象』に往々生ずる事ある可き前述の如き或種の論理的矛盾をはっきりと意識しつつ此の構文 (**Formulierung, Ausführung**) を敢行したと云つて構わないでしょう。しかも、区別を意識しつつも、本来の自我と云い、目前の関心網を右往左往している表面の自我と云い、共に結局は常識の立場からは単に『自分』ということになっている其の普通の自我だということと言外の余韻にひびかせんとして、文法的には、ドイツ人の考へ方に非常に親しい此の再帰構造という奴を採用しつつ自分の **Gedankengebilde** の内奥を簡潔にほごして見せたのでしょう。なお **Heidegger** の事は今後もしきりに引合ひに出すつもりです。

最後に、sich übertreffen の例をもう一つ挙げて参考に供しておきます。前と文脈までよく似ているから、如何に普通よく用いるものであるかがわかります。

Ich habe mich in diesem Buche, so zu reden, selbst übertreffen.
So oft ich es lese, so oft lerne ich auch Neues daraus.

(Lessing: Der junge Gelehrte, II.)

So zu reden (= So zu sagen) とことわってある所を以て見ると、少くとも Lessing の時代(従って前に引用した題文の Wieland も同様)には、まだ多少新しさの魅力があった、即ち多少奇抜な (gewagt) 云い廻しであったと判断していいでしょう。現在ではもう普通になっています。

Hat er sich erst für deinen Freund erklärt,
So sorgt er selbst für dich, wo du dir fehlst.
(Goethe : Tasso)

あの方は、一旦あなたの味方になると声明した以上は、たとえあなた自身があなた自身にとって頼りにならない場合にも、ちゃんとあなたの為めを計らってくれる人ですよ。

此の sich selbst fehlen(自分自身にとって欠ける、つまり自分から自分が抜けてしまつて、本当の自分が何処へ行ったかわからなくなる) と云う云い廻しになると、問題がなお一層微妙になって来て、これをどう云う風に考えるかと云う事が非常な問題になって来ます。

茲でも、前に幾度も云った事をあてはめて考えて見ると、考え方がわかる。『現在のままの、具体的な、ありの儘の自分』は勿論 fehlen するわけではない。五尺の身は現在茲にある。けれども、その人その人によって理想とし、或いは Heidegger の云うところの das eigentliche Selbst という奴の je mehr oder minder abgeleiteter Modus(其の場合場合に依じて多少に拘らず派生的な変態)が「欠ける」、すなわち『見失われる』のです。たとえば、勇敢を以て任じている軍人が、いざとなって『不覚』を取るというのは、その場合、彼自身がそれを真の自己とこ誇信しているところの『勇敢なる自己』(Heidegger のいう eigentliches Selbst の最も末梢的形態)が行衛不明になってしまったのです。また例えば、どんな偉い人にでも時には『本来の自己』から何時の間にか脱線しているのに気がつかずに平気で線路以外を走っている瞬間があつて、そうした瞬間には、つい気を許していると、とんでもない「自分とも思えない様な」、いわゆる『心にもない事』をしでかす事がある。そうした瞬間には、『彼には一時彼自身が欠けた』のです。Er fehlte sich selbst (又は、こんな時には er fehlte ihm selbst と云うことも許される、再帰代名詞として ihm や ihn を絶対に使わないと考えるととんでも無い誤りで、ドイツ哲学では、sich の代りに ihm や ihn がどんどん使われています。)また、もっと違った例を挙げるならば、理性では明らかに斯うした方が好いと判断できるのだが、気持の方が、くだらない惰性のために曳きずられてその決心がつかない、たとえば、冬の朝なんか、ちゃんと眼がさめていて、もう起きるんだ、もう起きるんだ、と、ほとんど不甲斐ない自分を叱咤激励しながら、しかも五分たち十分たつても一向起きることが出来ず、遂に遅刻してしまうなんて時には、是れ正に『Ich hatte mir selbst gefehlt』という可きでしょう。

なお sich fehlen の例をもう一つ挙げておきます。

Ich habe keine Vorstellungskraft,
kein Gefühl an der Natur, und die
Bücher ekeln mich an. Wenn wir
uns selbst fehlen, fehlt uns doch
alles. (Goethe : Werther)

私は想像力というものが
なくなった自然を見ても何も
感じない、書物にもうんざり
する。自分の気持が自分で
なくなると、なにもかも空っぽ
になるものと見える。

これも、解釈するとなれば、wirの方が『芸術家としての本来の自己』で、uns selbst

の方が目下の現実の自己だということになりましょう。

この sich selbst fehlen という考え方と言い廻しは、古くは羅匈[ラテン]語にも出て来ます。(仏語の se faire défaut 等も勿論のこと)たとえば：

Quare quantum connti potes,
quantum labore contendere (si
discendi labor est potius, quam
voluptas) tantum fac ut efficias:
neve committas, ut, cum omnia
suppeditata sint nobis, tute tibi
defuisse videare.

(Cicero: De Officiis. III.)

故に、汝の力の及ばん限り、
汝の努力(もし勉学をしも愉楽
と呼ばずして仮に努力と呼ぶ
ならば)に依って達し得る限りの
成績を収めんことを心懸けよ。
汝としては、余の心尽しを
受くる何不自由なき身なるに、
心ぬかりて人後に落ちけるよと
云われむ事ありては一期の不覚なるべし。

この場合の tute tibi defuisse は、むしろ己れの尽すべき所を尽さなかった、の意の sich selbst fehlen です。

また、同じ意味で、von sich selbst im Stiche gelassen werden (自分自身によって見捨られる)という言い方も参考になるでしょう：

Haben wir nun erforscht, wo unsere Stärken und wo unsere Schwächen liegen, so werden wir unsere hervorstechenden natürlichen Anlagen ausbilden, gebrauchen, auf alle Weise zu nutzen suchen und immer uns dahin wenden, wo diese taugen und gelten, aber durchaus und mit Selbstüberwindung die Bestrebungen vermeiden, zu denen wir von Natur geringe Anlagen haben; werden uns hüten, das zu versuchen, was uns doch nicht gelingt. Nur wer dahin gelangt ist, wird stets mit voller Besonnenheit ganz er selbst sein, und wird nie von sich selbst im Stiche gelassen werden, weil er immer wußte, was er sich selber zumuten konnte.

(Schopenhauer : Die Welt als Wille und Vorstellung, Band I , § 55.)

一たび吾人自身の長所が那边にあり、また弱点が那边にあるかを突きとめた上は、吾人としてはおそらく吾人の有する顕著なる天稟の才を琢磨、活用し、凡ゆる方法によって之れを利用すべく努め、それらの天稟が役立ち引き立つ様な方面に身を振り向け、生来不向きと思われる様な努力に対しては、克己力を以て極力之れを回避し、どうせ出来ぬと決まった事にはむしろ一切手を出さないという事になるであろう。斯くの如き境地に達したる者にして始めて全幅の分別を以て恒久不変に自己その者たることを得、常に自己を知り分を辨え来れる以上、いざと云う場合に臨んで我にもあらぬ不覚を取る等の惧れは絶対でないであろう。

此の文にあつては、ganz er selbst sein とか、sich selbst zumuten (己れ自身に向つて要求する)とか、すべて自己というものの自己自身に対する関係が問題になっていますから、von sich selbst im Stiche gelassen werden という云い廻しは、決して奇抜ではなく、極く自然に出た考え方であろうと思います。Schopenhauerの主著 Die Welt als Wille und Vorstellung は勿論哲学書ではありますが、此処に引用した個所には、別に所謂哲学なるものはちっとも現れていない、むしろ哲学書にしては余りにも常識的すぎるほどの処世訓ですから、従つて ganz er selbst sein とか、von sich selbst im Stiche gelassen werden 等は、いわばマア、独逸の裏店のおかみさんでも平気で口にし得る程度の極く通俗なドイツ語であるといつても過言ではありません。裏店のおかみさんすらも『自己が自己によって見捨てられる』などという、主観対主観の微妙な関係を表現する観念哲学的概念機構を弄ぶだけの哲学性を具えているというのは、実にドイツという国は何処まで哲学的な国なんだろうなどと思つてはいけません。因果関係はむしろ其の逆順なのであつて、ドイツ人(及び西洋人一般)は、裏店のおかみさんですらも主観という現象を、その主観という現象自身に対して或種の再帰的關係に置いたり離したり引くから返したり仰向けたり出来るような理屈っぽさを備えた人種で元つからあつたが『故に』主観と主観との

鉢合せを以て人間界最奥の微妙な理屈を云い表わそうとする努力が哲学の方面に於ても期せずして生じて来たのであって、我々日本人にはひどく高尚な変った天外の奇想と思われるかも知れないが、ヨーロッパそのものの言語、習慣、常識、『意味形態上の習癖』から出立して考えるならば、かれらの哲学はちっとも天外の奇想でもなければ常識離れの高遠な理屈でもなくむしろ余りにもヨーロッパ的常識の範囲を出ないものが多すぎて困る位なのであります。

だから、殊に哲学などに興味を持たれる方には、主観とか客観とかいむずかしい事柄をお考えになるより前に、まず言葉によって『現象ヨーロッパ』というものを意味形態の方面から研究され、たとえば *sich selbst fehlen* とか *übertreffen* とか云ったような普通の標準的俗人の頭の中にも蔓[つる]っていて *gang und gäbe* (あたりまえ) になっている云い廻しを完全に己がものになさると宜しい。またそれでなければ一言一句自信を以って哲学書の真意を把握することは不可能だろうと思います。ドイツ哲学の受入れや受け売りは、最近十年ほどはよほど進歩して来ましたから、好い加減なお上品な学者振りには此処数年を出でずして流行遅れになり、実感と自信とによる研究でなければ問題にされないような時代が来ないとも限りません。たとえそんな時代は来ないにしても、少なくともそうした行き方が社会の表面に現れることになれば、それは非常な勢いを以って学会を風靡するでしょう。再帰代名詞はほんの一例にすぎませんが、しかし此の一例は万例を凌ぐ格好の一例ではありませんか。

So ist der Mensch ein Wesen, das über sich selbst hinauswächst,
etwas, über das wir hinaus- und zu dem wir hinaufstreben müssen.
(Eucken : Der Sinn und Wert des Lebens.)

だから人間は、謂わば我れとわが身を越えた彼方に向って
育ち脱げんとする生物 即ちいずれは乗り越え追い越される
可き何物かであると同時に、また其の努力の彼方にあつて差
し招く目標でもあるのである。

此の文になると、主語になっている自我と、*sich* によって指されている自我との間の概念的相違は露骨に明瞭です。*über sich selbst* によって意味されている関係は、すぐ其の次の文の *über das wir hinausstreben* によって規定されている *etwas* と、*zu dem wir hinaufstreben* によって規定されている *etwas* とが、空間象徴的 (*raumsymbolisch*) に考えても、全然別個の位置を占めているのでなければ *über -- hinaus* とか *zu -- hinauf* とかによって示されている譬喩的運動が成立し得ないと云う事実を以てしてもわかります。それはそうでしょう、たとえば紙の上にポツンと只一つの黒点を打って、さあ君、この鉛筆の先端を此の点に置いて、それから『この点を脱出し』つつ、しかも同時に『この点に向って』鉛筆の先を動かして見たまえ、と云われたら、一寸困ってしまう。なんなら、先端を素速くチョット黒点から離してすぐまた元の黒点の所へ近づける、ということも考えられるが、それでは『同時に』ということにならない。また、他の方法としては、精神一到何事か成らざらんテンデもって、先端を黒点に刺し込んだまま、エイと気合いを掛け、渾身の力を振ってきばって見せるのも是れ亦一つの解決法かも知れないが、たとえどんなにきばったところで高々糞が出る位なもので、鉛筆の先端が『動いた』ということにはならない。只今の例文をよく空間的・論理的に考えて見ると、稍[やや]それに似た関係になっていることがわかりましよう。

要するに、こうした再帰的な考え方の基礎には、理論的齟齬(即ち分解すれば結局例の *Duae propositiones contradictoriae non possunt esse simul verae* "相反する二個の命題は同時に真たること能わず")を充分に承知の上で仕組まれたインチキがあつて、また其のインチキがつまり考え方の面白さを成しているわけです。 *Man muß auch Spaß verstehen können!* "ちっとは洒落も解らなくちゃ不可ん"という訳でしょうな。

洒落といえ、およそ洒落を論理的に分解して其の心を云ってしまうほど野暮な興醒めはありますまい。*über sich selbst hinaus* と普通云って居るものなら、なにも主語と *sich*

とが別物だとか同じ物だとか、齟齬が有るとか無いとか、そんな野暮の屁理屈を云わなくたって、ただ漠然と面白く『自分を越えた彼方へ』と考えて、齟齬を意識するにも非ず、また全然意識せざるにも非ず、意識する所にスリルを感じ、意識せざる所に纏まりを感じ、あれやこれやが程よく融け合い流れ合ってジイワリと落ち着く所に落ち着けばこそ、茲に即ち、得も云われぬオンボリとした渾一体の統一感が醸し出されるのであって、此の統一感を称して取りも直さず『言い方が面白い』或いは『巧い事を云ったもんだ』と云うのでありましょう.....

けれども-----茲が言語と思想との関係の面白いところですが-----哲学者という奴は、とかく野暮なところに穿鑿の眼を向けるとしたもので、なんなら洒落の心にまでもメスを揮って分析解剖の労を執ることも敢て辞しません。辞さないどころか、此の *über sich hinaus* という句の中に隠れている論理的矛盾その者の中に、深き意味の含まれていることに気づきます。否、むしろ、かくの如き論理的矛盾を犯さないでは云い表わす事の出来ない程『人間という現象』が一種特別な不可思議な問題を蔵する現象であると云う点に注目する。なるほど、文法的・論理的に云えば、文の主語と *sich* とは同一物でなければならないから、同一物と同一物との間に衝突が生じたり、火花が散ったり、摩擦が起ったりするという事は理屈には合わない。理屈に合わないけれども事実合っている。A と B とは同一物であってはならない。けれどもまた一面同一物でなければならない点もある。その辺の関係が此の *über sich hinaus* によって丁度うまい具合に表現されているのだから、哲学にその儘を用いて悪かろう理由はない.....

思想は言葉に凭[もた]れて歩む、言葉は思想を通じて進む、進むとまた思想が後について躍る、思想が躍ると言葉が飛び揚る.....

sich という考え方は、なるほど西欧民族の思想の飛躍の結果として重要性を有するに至ったには違いありません。けれどもまた一方、西欧民族の思想の飛躍に、既に始めから *sich* という概念が存在していたということが、どれだけ資する所があったことでしょうか！否、既に思想の飛躍以前に於て予め *sich* という小さな言葉が頻々として用いられたという其の事が、後日の再帰哲学(私は敢てそう呼びたい)お約束する力強い萌芽が既に予め本性の中に伏在した事を証しはしないでしょうか？

然しまあ、そんな事は、少し雲を掴むような *Deutelei*(解釈三昧)に迷い込んでしまう危険性が多いから、まあ大抵にして止しておきましょう。ただ一つ最後に少々問題にして置きたいと思うのは、各々別個の概念を指すが如くに思われる *über sich hinaus* 等に於ける、謂わば二重の主語という現象が、ドイツ哲学では一つの重大な問題になっていて、其処に謂わゆる *Existenz* という概念が生じて来ると云う此の一事です。此の *Existenzbegriff* なるものは、丁度此の *Eucken* のことばの *Der Mensch ist ein Wesen, das über sich selbst hinauswächst* というのに依って、極く何人にも解り易く言い表わされております。即ち、其の次に云ってある如く、便宜上自我なるものを *etwas, über das wir hinausstreben* 換言すれば、『過渡期』、中継、踏台としての現在の自我と、それから *etwas, zu dem wir hinaufstreben* 換言すれば『理想』としての、『目標』としての、来るべき自我との、この二つの機能に分けて考えることが出来る。そうすると、人間の存在というもの哲理的に説明するのに非常に都合の好い色々な関係が自働的に提供されて来ます。即ち、一方の現実の自我の方は、殆んどそれ自体としては(即ち他方の自我に対する相関性を考えないでは)意味を成さないという面白い事実が発見されてくる。そうでしょう、現実の自我は、『現実』だから最も確かであるべき筈なのに、『どうせ直ちに放棄される可き仮の宿』だということのだから、それ自身既に非常に疑問な存在です。ところが目標となっている理想の自我の方にしても同じで、理想というと大変頼もしい様だが、その理想というのが、到達されるというと同時にまた前述のそわそわした現実の自我に変わってしまうという、実に一寸変な理想なのです。這般[しゃはん]の関係をもっと明瞭に表現するならば、現実の自我は『早く投棄されんがためにのみ専ら存在している』換言するならば *Es ist da, um möglichst bald nicht mehr da zu sein* (なる可く速く無くならんがためにのみ有る)という矛盾を持っています。理想の自我の方は、『なる可く早く現実の自我に成らんがため、換言すればなるたけ早く理想の自我たることを止めんがために、なお換言すれば、なるたけ早く存在せざらんがために存在している』としか思えない。-----つまり、二つの自我は、両方とも、それ自体としては安固たる概念たり得ない、謂

わば哲学上の分解手段としての、便宜上一寸作って見た「概念」なので有りまして、そのいずれも、それ自体としては「人間」そのものの存在を定義するわけに行かない。では何が人間の存在を定義するに適するかというと、丁度その二つの概念の衝突と云いますか結合と云いますか、なんなら正直な所を云って『その両者の文法的結合』が、不思議にも意義深く人間というものの時間的存在の内面的動きを形容するのに丁度好都合になって来るのであります: **Der Mensch ist ein Wesen, das über sich selbst hinaus wächst!** こういう風に、方向として考え、動きとして考え、時間として考え、可能性として考え、発展として考えた「存在」の概念を、近時のドイツ哲学に認められた用語として Existenz と名づけても差支えないと思います。

私は敢て滑稽化して意地悪くも『文法的結合』と申しました。哲学者は或いは憤慨して、文法的とは何だと云うかも知れません。それに対しては私は斯くの如く答えましょう: あなた方がもし真に哲学者であったら「文法的」という形容詞をそう簡単にはお考えになりますまい。

第二講

今回は、常識の世界では只一つのポツンとした一点であるかの如くに考えられている『自我』と云う此の不思議な中心をば、仮にまあ言葉の上だけでもせよ、文法という筋路によって自然に与えられた形式を濫用・悪用・善用・巧用乃至奸用しつつ、之れを『主語自我』(ich)と『再帰自我』(mich)とに言い分けると云うことが、この、貴君方も、斯く申す私自身も、またその他の幾億の生霊が何十年来一生懸命にやりつつある『人間という現象』に起って来る或種の姿態・動向・局面を表現するのに大変好都合であって、ドイツの哲学は申すに及ばず、巷間喋舌られる所の日常ドイツ語までが、此の好都合に便乗して丁度巧い具合に思った所へ吹っ飛んで行くという話をしたのでした。勿論、此の便乗は、至当の権利を以て行われるものであるか、それとも或種のカンニングで、謂わば其の辺の漬っ垂れ小僧が通り掛かりのトラックのうしろへ飛び乗るのと同断であるか、這般[しゃはん]の決定はまあ当分ちょっとお預けにしておくのです。

そこで今回は、なおも其の考察を奨めて行って、単に言い廻しが面白いとか、ドイツ人の考え方の癖だとか云ったような、単なる物好きの・常識的立場から一步奥へ乗り込んで、これらの表現の根底には、或いは或種の系統立った『筋路』と云ったようなもの、沢山ある表現の中から読み取れる或種の深い意味といったようなもの、一言にして云えば、話は大きいですが、ちょっとまあ『再帰哲学』とでも云ったようなものがありはしないか、という此の見地を中心にして、なる可くまあ座談的に、元来ならばかなり厄介なる可き筈の哲学上の一問題にも触れて見たいと思います。

まず、二重なものとして考えられる一にして同時に二なる複自我なるものの各々が、詳しく云えば各々何者であるか、そして此の二つの間に『動詞』というものが介入し来る事に依って一見生ずる如くに思われる種々様々な交渉・関係・摩擦は抑々何者であるか?これが興味の中心でなければなりません。

前回に於ては、直ちに問題の中心に触れようとして、『現実自我と理想自我』の区別が概念として露骨に際立ってくる場合を選んで説き起こしました。けれども-----これは誤解の無いようにはっきり断わって置かなければなりません-----文法上の『主語自我』(ich)と『再帰自我』(mich, mir)との区別が、何等かの意味に於て此の『現実自我』と『理想自我』との区別なるものと、一定不動の関係にあって、たとえば主語は必ず現実自我であり再帰代名詞は必ず理想自我であるとか、或いはまた其の逆の関係であるとか云ったような事は全然ないのですから、此の点は特に注意して頂きたい。前回の文例を御覧になれば、そんな点は極く出たところ勝負で頗る勝手気儘なものだと云う事は充分おわかりになると思います。否、それどころか、這般の現象に一步を深く乗り込んで云おうとするならば、此の『勝手放題に、出たところ勝負で、どちらをどちらにでも自由に振り向ける事が出来る』と云う事実その者の中に実は再帰哲学の根本問題が潜んでいると云って好いのです。まだ再帰哲学そのものを紹介もしないうちに突然こんな事を云うと、恐らく素人をびっくりさせる為めにマグネシウムを焚いていやがる、或いは『誤魔化すために反動的に出て来やがった』などとお思いになる方が無いとも限りませんが、

そうではない、もっと論を進めて行くといずれ判って来ますが、此の一見気随気儘なるかの如き点に、実は這般の問題の眞の白熱的中心があるのです。

それは一体どう云う意味でしょう？-----まず一番最後に来る可き筈の結論を此の際チヨツと袖の下から覗[のぞ]かせるとすれば大体次の如く説明することが出来ましょう。即ち、現実我と云い、理想我と云い、それは単に考え方の便宜上 "設けた" ものに過ぎないのであって、眞に実在するものは、一見その二つの間に副産物として "生じて" 来たかの如く誤解される傾向を持っているところの "摩擦"・"分裂"・"関係"・"交渉" といったような "動き" その者である！だから、二つの自我が先ず最初に在って、その次に其の二者の間に其の時々の "行きがかり" が生ずると思うのは誤りであって、事実はその逆で、我々人間というものの正体は、実は先ず第一に "行きがかり"、"羽目"、"局面"、その者なのであって、此の "行きがかり君" が御自分自身のことを反省したり云い表わしたりしようとする時に(此の "反省"、"表現" が既に早速また "行きがかり" の一種です)、単なる渾一体では都合が悪いから、せめてお互いにぶつかり合って註文通りの響(此の響が取りも直さず、"行きがかり君" 御自身なのです!)を発するような、"二部分" を持たなければならぬ必要上、大体その目的(即ち：響!)を念頭に置いて、謂わばエイッと気合いをかけたとたんにヒョイとひり出されるのが即ち現実我と理想我の両極端です。気合いでひり出す事だから、その時次第で、どちらの方角へどっちが飛び出すかは、やって見なければわからない。また、どちらの方角へどっちが飛び出そうと、元来の目的を念頭に置けば、そんな事は結局どうでも好いわけで、(これで先刻のマグネシウムがまた改めて輝くわけだが)否むしろ『手段を選ばない』と云う其の事それ自身が元来の目的、元来の中心、元来の現象そのものをば確乎たる一定の方向に向ってピッタリと指しているではありませんか！

乗り換え切符を買う時に、ほんとうにどこか一個所に用事のある客だったら、車掌が何処に鉢を入れようと平気であるに違いない。否、通過すべき方向が随意であると云う其の事それ自体が、直ちに以って元来の用事が一定の場所にあるという事実を最も雄弁に裏書きするものではないでしょうか？

言語現象の方も同様です。私が凡ゆる機会に提唱して来た『動詞中心論』、『定形即文章論』は此の方面からも亦深く根拠づけられるわけで、一たい言語というものと思想というものとが如何なる点で結びつき合っているかと云えば、それは専ら『動詞』という品詞によって前述の "行きがかり"・"羽目" 云々と結びついているのです。主語とか補足語とか云ったようなものは、単に動詞の中からエイッと気合いでヒリ出されるものに過ぎない。這般の関係は前述の話と全然同様です。たとえば *Diese Neuigkeit überrascht mich* と云えば、この現象の中心は元来 *überrasch-t* だけ、否、もっとはっきり云えば *-t* だけです。云いたい事の中心は元来 *-t* という一点にあるのです。たとえば貴君自身がドイツ人と相対していて、日独協定のニウスを初めて聴いて、その気持を表現する..... じゃあなかった表現『しかかる』混沌たるまごつきの一瞬を想像してごらん下さい。云おうとする中心ははっきりしている、しかし其の中心をどういう風にほどこいて、どう云う部分とどう云う部分とに分けたらドイツ語らしく纏まるかわからない.....

そういう瞬間に、一ばん拙[つたな]いことは『根本をなす動詞』がはっきりしないうちに、*Ich.....*とか *Das.....*とか云ったような、派生的な、末梢的なものの方が先に飛び出して来て、たとえば支那問題に出先の官憲の方が先きに乗り出してしまつて、中央に向つて、単に自分の尻拭いのための "根本方策" を強要して来るといふ、本末転倒外交になるのと同じようなわけで、元来の基礎たる動詞を、末梢的な主語などが自分で勝手に選ぶとするものだから、そんな軽業が平気で出来るドイツ人自身ならばいざ知らず、融通が利かない我々の頭は、それがために益々融通が利かなくなつてしまふ。*Das.....*と云つたら *Das ist eine überraschende Neuigkeit!* とやる、*Ich.....*と云つたら *Ich bin wirklich überrascht!* とやる、*Sie.....*と云つてしまつたら *Sie überraschen mich mit dieser Neuigkeit!* とやる、と云つたような事になるでしょうが、これらの構造はすべて中心の動詞から出立して計画されるのであって、*ist* が定形であつたらどうしても *sein* と云う動詞の "支配" 関係から前後の名詞を創らなければならない、*überraschen* だつたらまた *überraschen* の "支配" 関係によって前後を捻り出すと云つたように、既に此の "支配" と云う現象が動詞から名詞へ、或いは動詞から前置詞へ、前置詞から名詞へと云つたよう

に方向が一定していて、決して其の逆順(たとえば名詞が動詞を支配したりすること)が無いと云う事が、言語現象というもののシステムを露骨に明らかにして居り、またそのシステムの落ちてく最後が("支配"現象の根源が)翕然[きゅうぜん]として『動詞』、或いは正確に云えば『定形』の一部に集中して来ることがわかります。-----従来、或いは現在も一般に行われているところの、『主語』と『客語』とを並べて、その間をコプラだか何だか、変な貧弱な『繋ぎのことば』がヤッコラセと繋いでいると云ったような考え方は、あれは中世紀流の実体哲学の副産物として起った文法であって、実体(substanz)哲学から発した文法が名詞(Substantiv)中心主義に傾くのは自然の趨勢で、これが西洋の哲学を数世紀に亘って毒して来たと同時に、現在に於てもなお文法を、言語学を毒していることと云うことが出来ます。(此の点は既に nomen actionis の研究の当初に於て触れておきました、また今後と雖も文法というものの内部に提供されてある凡ゆる角度から種々の筋路を通して幾回でも幾回でも此の問題に触れたいと思っています。)

以上の如き関係から、主語対再帰代名詞の関係と、前講に述べた理想自我対現実自我の関係と、此の二つの関係の間には、何等拘束的な一定の直接的な結びつきはないのです。

それからもう一つ重要な考察をして置かなければなりません。こんどは語学哲学の問題ではなくて、哲学、即ち形而上学の重大な問題です。(この二つの問題の関係からして、茲で謂わゆる『再帰哲学』なるものが生じて来るのです。)

第二の問題は斯うです。前回、極く極端な場合、しかもわかり易い場合から説き起そうとして、仮に『現実我』と『理想我』と云う、或種の場合にのみしか通用しない対立をば当面の例に取って来ましたが、愈々 Existenz という現象の全貌を明らかにせんがためには、此の余りに規定され過ぎた対立は一事捨てなければなりません。全部を捨てると云うのではなく、謂わば其の機構を採って其の内容を捨てるのです。

内容も其の全部を捨てるには及ばない。『現実我』の方は其の儘保全してもよろしい。捨てなければならぬのは、『理想我』という規定です。これも実は全部捨てる必要すらないので、理想我という形容詞がほぼ妥当なことが場合としては一番多いのですが、しかし現象に忠ならんとするならば、理想とか何とか云ったような積極的な定義は少し素人だましになるので、やかましく云うならば、『現実我に或種の動きを生ぜしめるための手段として考えられる非現実我』ということになります。或種の動きというのはどう云う動きかと云うに、これが先刻も述べた行きがかり・交渉・関係・態姿・態勢・局面そのもの、即ち吾人自身の間現象です。(此の間現象が言語現象となると、それが『動詞』です。)

現実我の方はどうして訂正する必要がないかと云うと、これは最も確かな表面的現象で、一方『言語』という現象が、これがもう其の現象の現象たる所以から考えても、実際から考えても、これ亦最も表面的な現象ですから、この両者は未来永劫に亘って、苟しくも人間が人間する限り、大盤石の如くに動かない二つの不動現象です。不動現象でありすぎて人間存在の如実を云い表わすに最も適しないからこそ、これを何とかして動的なものにしよう、動的に『支配』せしめよう、流れるものにしようとする事になって来るのではありませんか?-----要するに現実我の方は、今後一貫して、やはり現実我という術語で考えて行くのが最も妥当なのです。

では、問題の非現実我なるものは抑如何なる種類のものか? 定義は出来ないにしても、せめて何とか形容して、その機能の一端を明らかにすることは出来ないものか?-----それは出来ないことはありません。ただ、其の形容をする際に、その非現実我なるものが何等かの意味に於て実体(Substanz) であるとか、名詞(Substantiv)に相応しい本質とでも云ったようなものを持っていて、それを科学的に研究すると云ったような妄想に陥入[おちい]ることは、度々云う通り、これはむしろ再帰哲学の根本を破壊した上に立たんとする努力のようなものであって、此の際むしろ積極的に破壊されなければならないのはむしろそうした考え方その者なのです。

しかしまた、その点をちゃんと念頭に置きながら、形容の文句そのものには大して拘泥しないという条件の上で形容するなら一向構わないでしょう。すなわち、大体の面目

を明らかにするとすれば、非現実我という者はちょっと次のような事になるでしょう：

非現実我と云うのは、何等かの意味に於て、現実我と多少の距たりのあるものである。或いは現実我と併存両立しながら所謂『自己分裂』という緊張を惹起し(此れを本講の後半で先ず扱います)、或いは現実我の数歩手前にあって之れを吸引牽動し、或いは現実我の根底に鎮座して之を後顧内省せしめ、或いは現実我の背から追って之れをして無意識裡に寝返りを打たしめ、或いは一時忽焉[こつえん]と姿を晦[くら]ますことによつて現実我を極度の不安に陥入れて途方に暮れしめ、或いは忽ち姿を隠したまま現実我の一步手前に立って、その現実我に向つて投げる影と気配とによつて之れを本能的に誘導し、或いはいわゆる良心の声となつて現実我そのものの中から之れを揺さぶり、或いは時とすると一錢銅貨を二枚重ねて置いたように現実我そのものと『一致することなく重なり合つて』或種の充足と満足と静止観を味わしめ、或いは忽ち理性眼を以てそれと把握し得る体の『理念』となつて現れて現実我を叱咤鞭撻[しつたべんたつ]し.....

とにかくまあそう云つたような機能を發揮するものです。空間象徴的な云い方で誤魔化すとすれば、二者は永遠に一致せざる二つの点です。また、その、『一致せざる事』が人間の定義になつて来るのです。そして二者の間には何等かの形態で、常に或種の緊張と局面と羽目と行きがかりがあります。並べば並んだで自己分裂という不安な緊張が生ずる。一致すれば一致したで、本来一致してはいけないものが一致したような変な不自然を呈するから之れがまた分裂以上の妙な状態を引き起す(自足・満足・etc.)。居なければ居ないで Ich fehle mir selbst という前回に述べた変な羽目が生ずるし、居れば居たで其の間にパチパチ火花が飛ぶ.....そして其の羽目、其の花火、これが取りも直さず抑々そうした二つのものを『設けて』考えたり云つたりしなければならぬ本来の中心現象なのです。

こうした非現実自我を設けたことによつて、現実の自我は忽ち事実界に於て我々が現にやっている通り、考えたり、心配したり、喜んだり、計画したり、反省したり、一言にして云えば(次に取り扱おうとする観方ですが)自我の『進出』、『自転』、『転向』、『空転』、『自立・自足』、『収縮』、『宙ぶらりん』といったような諸種の形態を取り始めることとなります。否、単に取り始めるではない、『哲学的に意義深き姿態を以て』取り始めるのです。

以下、その最も特徴的な場合を五つ六つに分けて事例に即した考察を以て順々に検[し]べていきますが、どうか全体の Thema を御見失しなきようねがいます。

Die fremde falsche Welt ist nicht für dich ;
Dort an dem stolzen Kaiserhof bleibst du
Dir ewig fremd mit deinem treuen Herzen !
(Schiller : Wilhelm Tell. II. 1.)

心許せぬ異郷の空はどうせそなたの性には適いませぬ。
今の世に時めく皇帝の大宮御所なぞに詰めて御覧じませ、
純情なそなたのことゆえとかく気持のそぐわぬ事のみ多くて、
何時までたつてもしっくりした気持にはなれませぬ。
まい。

Bleibst du dir ewig fremd は、換言すれば kommst du dir selbst wie ein anderer vor, 或いは wirst du dich selbst nicht mehr wiedererkennen, などとも云つても好い。というのは、たとえば『君はすっかり人が変わったね』とか『君はどうもすっかり別人みたいになつてしまつて、ちょっと勝手がわからなくなつた』等を Du bist ein anderer geworden ! Du kommst mir ganz verändert vor ! Ich kenne dich nicht mehr ! などと云うから、それを自分自身に向つて云わなければならない様な状態だと思えばよろしい。

また実際それを自分自身に向つて言うこともある。一たい毛唐人と云う奴は、いわゆ

る Monolog (Selbstgespräch)なるものをやる時には、自分に向って du で話し掛ける。『さあ、おれは一たいどうしたらよかろう?』というのを Nun, was soll ich jetzt ?という代りに、Nun, was tust du jetzt ?とか Nun, gib acht und sieh an, was du jetzt beginnst !とか云ったように、自分で自分を二人前扱いにして詰問したり激励したり罵詈[ばり]したりする。これは決して文学的な事ではなくて、日常の風習なんです。そして此の事実がまた民族心理的にも哲学的にも非常に興味があり、また筆者の These である所の、彼等ヨーロッパ人がその素質に於て我々東洋人よりは一段と深く自個分裂の皺の寄った『再帰的』な考え方の常習者である事の露骨な証左なのです。

要するに bleibst du dir fremd の意味は『自分のする事なす事が自分自身にとってしっくりしない』ことです。単に日本語の謂わゆる『借りて来た猫みたいだ』とか、また況んや単に『勝手にわからぬ』とか『まごつく』とかいうのとは根本的に違って、もっともっと内面的な自己分裂の事が問題になるのです。此の場合について云うならば(題文の台詞は Bertha が愛人の Rudenz に向って諫[いさ]める所ですが)、もし純情な青年たる Rudenz が、虚々実々、譎詐百端[けっさひやくたん]、表裏を見抜く事の却々[なかなか]むづかしい社交場裡などへ出掛けて行ったら、今まで通りの自分で押し通すことが出来なくなる、そのうちには自分自身の言動も亦四圍の雰囲気に染まって、いつの間にか軽薄な悪擦れた事をするようになる.....ところが(此の次が大切です)それで人間の本質が根本から改造されて、内面的に、本能的基礎からすっかり都会人になってしまうと云うのなら何も問題はない、それはもう全然人間が変わったので、たとえ悪く成ったにしろ、それならそれで mit sich eins (自己と一致する、統一が生じ、まとまりがつき、確乎として抜く可からざる基礎が生じてしまう、等々.....)なものとして、或種の意味に於て充分幸福である(これが次講で述べる Er gefällt sich とか Er ist mit sich selbst zufrieden 等に当る).....ところが Rudenz の場合はそうでない。かれは、根強い田舎者なのです。たとえ若気の野心や憧憬で、ちょっと軽薄なすれっからしな真似をして見たところで、付け焼刃は結局長持ちはしない、根底は何時かその権利を回復する、『生地』ほど粘り強いものはない、この意味に於て人間というものは善い意味にも悪い意味にも、箸にも棒にも掛からぬ『保守的』な正直な存在ですが、Bertha はつまり此の永遠に人間的なる宿命的保守性の恐ろしさを説いているのです。

同じ意味に於て、たとえば『日本人である』ということも一つの宿命であり本質であると見えます。よく見受ける例だが、若い時には非常に西洋崇拝で、考え方から何からすっかり日本人離れがして、こいつは一寸変わった男だなど思っていると、やがて四十二なり五十になると、する事なす事がすっかり段々と日本人らしくなってきた、日本人離れがしていると思ったのは単に若気の勢いに機[きざ]んだ一時の飛躍にすぎなかったもので、つまり

Er scheint mir, mit Verlaub von Euer Gnaden,
Wie eine der langbeinigen Zikaden,
Die immer fliegt und fliegend springt
Und gleich im Gras ihr altes Liedchen singt. [Faust]

という奴で、天命に抗する人為の末路を如実に想わせるような実例がよくある。本人自身が大童になって人為の極を尽した場合に於てなお斯くの如し。況んや、ちょっとした銜気などで学問をして見る男なんてものは、学問しながら実は学問がちっとも気持ちに一致していない。Solange er Wissenschaft treibt, bleibt er sich selbst fremd. うまくも何ともないものを、うまいうまいと思いながら食っているようなものです。食うのを止めたら、どうしても食うと云って聴かなかった『現実の自我』はちょっと不満かも知れないが、その奥に潜在して、現実我のために圧迫されていた『本来の自我』はホット胸なでおろして、まるで解放されたように楽になる。やがて、此の現実我の失脚のために、今まで在野党だった本来の自我が政権を掌握するようになると、こんどはもう天下の与論が一時に転向して、今まで云いたい云いたいと思いつつながら云えなかつた事を一時に爆発させる.....つまり個人の自我というものも其の本能的内面は全然一国家と同じ関係になっているのです。単に支那と云ったって、国民党的支那もあれば、親日的支那もあれば、それと直角に交叉[こうさ]した親ソ的支那もある。多元であり pluralistisch です。個人の自我もその通りです。だから再帰的局面が生ずるのです。生ずるといふのはむしろ正

しくない、それが常態なのです。挙国一致的局面といったようなものの方がむしろ一時の変態的局面です。

国家社会に関しては之れを *Geschichte* と云う。個人に関しては之れを *Existenz* と云う。*Geschichtsphilosophie* の対象であり後者は *Ontologie* の対象です。Hegel は前者に立脚して後者に達し得なかった。Heidegger は後者に立脚して前者に達し得なかった。

こうした自個分裂の局面に対しては、ドイツ語には種々様々な表現がありますが、*mit sich selbst entzwei* ; *mit sich selbst uneins* (或いは *uneinig* 或いは *veruneint*) 等になると、只今の *sich fremd* とはちょっとちがった、一段尖鋭化し表面化した意識現象になって来て、*sich fremd* の方が『根本が食いちがっていながらそれに気が付かないでいる』のだとすれば、前者は『齟齬を意識して手こずっている』状態です。その他、類似の表現には、ちょっと同じ方向に属するようでも『局面』としては全然ちがった形態であることが多い。Jaspers によって研究された世界観の心理などは、それらの区別を相当深く取扱った好い研究でしょう。

次に同じ *fremd* という姿態を取り扱った少し違った場合をもう一つ挙げておきましょう：

Geschah dies nun elbst an der gröber Genaturten unter der Menge,
so daß sie eine Weile wie sich selbst entfremdet vor sich hinstarrten,
und, da die Schnurren und Schwänke der Possenreißer wieder anhoben,
kaum mit halben Auge nach ihnen blicken mochten, so war Gerhard
Eschenauer vollents wie verzaubert..... (Heyse : Siechentrost.)

其の場に居合わせた随分感じの鈍い俗タイプの人々ですら、しばらくはちょっと我れと我が気持の勝手がわからなくなってぼかんとしてしまい、道化師どもが又侯さっきの続きをやって笑わせようとしても殆んど其の方を顧る者すらなかった位であるから、況んやゲールハルト・エッセナエルに至っては、すっかり恍惚としてしまった。

これはちょっと前からの続きを云わないと解らないかも知れません。大勢が集まっている場所で、道化役などがやんやと喝采されている最中に、突如として天籟[てんらい]の如き美しい音曲がひびき渡って、人々は思わずその方に耳を傾けた。その楽の音は或種の神秘的な力を以て、しばらくは一同を魅し去ってしまったが、みんながすっかり恍惚として魂を奪われている真最中に、その楽の音は力強い美しい一音と共に礮[はた]と歇[や]んだのです。題文はその瞬間を描写したものです。

音楽ばかりではないが、殊に音楽は人間の気持を全然別なものにします。それはたとえば群集心理、即ち大勢の中に挿まっている心理が、一人きりでいる時とは全然別な考え方、感じ方、欲し方を表面化せしめ、その瞬間の自己の言動を後から考えて見ると云うと、時には馬鹿々々しくなってしまうたり、時にはまた反対に『おれのような意久地なしが、よくあれだけの勇気が出たものだ！』と思うほどの事をやっている事がある。つまり之れが、人間と云うものが社会国家同様に幾重にも重なった多元的存在である証拠で、一人きりで物を考えている時の自分が『本当の自分』で、その他の自分が『一時的現象』だなどと簡単に決めてしまうことは絶対に出来ないので、多元的に見れば、結局はどれが本当だかわかったものじゃない、後から来るものほど本当だとも云えない。反省力を持った釣合の取れた状態ほど本当だとすらも云えない。実はその方が狂った自分よりはずっとずっと俗物で、むしろ多少中心が揺らいであっちこっちが狂わなければ『本当の自分』は解放されないで、どんよりとした平衡の中ではむしろ真の自己は持ち腐れになってしまうのかも知れない。-----まあそうしたことが再帰哲学の一部の問題となって来る。

音楽の美に打たれた群衆は、つまり、それがたとえ如何なる俗物であるにせよ、その瞬間は、彼等の中に、平素潜在していた『より良き彼等』がめざめたのです。即ち今まで単なる(Heidegger の用語を用いると) *Können*, *Möglichkeit* として存在していた理想自我が現実自我の王位を乗っ取って、平素のやくざな現実自我はしばらく楽屋へ引っ込ん

だのです。然るに、若しそうして相当の時間が過ぎて行つたとすれば、或いは理想自我も元来があまり生地のないものの事だから、自然 t p 倦怠弛緩して、俗物的現実自我が勢を挽回したかも知れないが、此の場合はそうではなくて、丁度膏[あぶら]の乗り出した頃に音楽が磻[はた]と止んだのだから、理想自我はスカを食ったように宙ぶらりんになってしまう、現実自我も現実自我で、時来れりとばかりに復び台頭するに何の差支えもないのだが、しばらく抑えつけられた頭はそんなに急には上らぬ。圧力が急にスッと消えた瞬間は、まだちょっと急には勝手がわからぬから、なお矢張り頸を下げたまま、上眼をつかつて、怪訝な顔をしてあたりをポカンと眺めている位なもので、まだ抑々我輩の天下になつたという気持ちが起らない。sich selber entfremdet は斯うした瞬間のことを巧く言い得ている。その次の、前通り道化役が笑わせようとしても、みんながなかなか笑わない、という特徴づけなども、此の場合の局面をまことに面白い一側から描いている。

言葉その他の『審美現象』が吾人の中に潜在するより良き自我を目ざますものであるという考え方は、これは決して此の場合の解釈に都合の好い様に筆者がこじつけているのではないので、そうした考え方は西洋人の誰もが一致して考えている、謂わば学理の世界に於ける Gemeinplätze の一つに属します。つまり誰でも云う事なのです。ほんの一例だけけれども、たとえば次の Theodor Lipps の説を一覧しましょう。本当の詳しいことは Aesthetik の方に出ているのですが、茲に引用するのは例の有名な Die ethischen Grundfragen の一個所で、講演風のものでありますから平明でわかり易いとおもいます：

Aller ästhetische Genuß ist seiner Natur nach Genuß der ästhetischen Einführung oder Sympathie. Ich verlege reproduzierte Regungen meiner eigenen Persönlichkeit nicht nur in den wahrgenommenen menschlichen Körper, sondern in jedes wahrgenommene schöne Objekt, z. B. in die Landschaft, in die Formen der Architektur, in die Klänge und den Rhythmus der Musik, auch schon in die einfache Linie oder Farbe. Und ich *erlebe* sie darin. Ich "beseele" diese Objekte, genau in dem Sinne, in dem ich den wahrgenommenen menschlichen Körper beseele. Dadurch eben *werden* die Objekte für mich "schön". Das Gefühl der Schönheit ist objektivierter Selbstgenuß. Ich genieße mich selbst, nicht mein tatsächlich gegebenes, aber ein ideelles, und schließlich ideales Ich, indem ich diese Objekte genieße. Ich genieße "mich selbst unmittelbar in einem anderen".
(Theodor Lipps : Die ethischen Grundfragen)

美的鑑賞はすべて其の性質から云って美的感情移入乃至感応共鳴の鑑賞である。私は単に私自身の心の動きの複写とも云う可きものを、知覚された人体の中へ置き移すばかりではない、その他知覚される凡ゆる美しい客体、たとえば景色、建築の様式、音楽の響と律動、否極く単純な色の中へすらも自分の中の動きを映写し込む。そしてそれらの対象の中に於て自己の姿を『体験』するのである。知覚された人体を活かすと丁度同じ意味に於て、それらの物象を活かすのである。そうする事によって対象がわたし自身にとって"おもしろく"『なる』のである。美感というのはつまり客観化された自己賞翫である。自分が自分そのものを賞翫するのだと云って好い。事実的に与えられた現実の儘の自分というわけではないが、理念的な、というのはつまり理想の自我を賞翫するのである。謂わば私は私以外の物の中に於て端的に私自身を鑑賞するのである。

此の Lipps の説は、例のいわゆる感情移入論(Einführung)という奴で、これは美学の方が主ですが、リップスは同時にこれを倫理の方にまでも持ちこんで、心理的に"利他主義"なるものを根拠づけている。ここで、人体を活かす(beseelenは、"魂づける"即ち"活かす"こと)とか何とか云ってあるのがそれで、Lipps の説明によると、我々が他人の姿を見て、他人の苦しみがわかったり、嬉しさがわかったり、その他とにかく一般に他人をも自分と同じような与件の下に存在している同一の複写として認めるのは、すべて Einführung によってそうなるのだということです。Wir führen uns in den andern ein という現象がなかったならば、他人という現象は単に知覚的与件の総計、或いはその総計から推論という間接な筋路を通してやっと『かるが故に此の木偶も亦余と同じ条件の下に喜怒哀楽しつつあるところの、要するに余に等しき人間なるものなる可し!』などと、『可し』附きの決済を下してやっと認めておく種類のものでなくてはならない筈ですが、

実際はそうではなく、生々しい実感を以て直接に他人を人間として認めているというのには別にわけがなくはならぬ、そのわけがつまり美学の *Einführung* と同じものだというのです。

その点がわかれば、只今引用した個所は充分おわかりの事とおもいます。

つまり、Lipps の論は再帰哲学的考え方です。再帰のことをドイツ語で *reflexiv* 即ち "反映的" というのなども、此の場合にはうまくあてはまります。たとえば、鏡の前に立った人が鏡の中に写っている自分のすがたを見て誰か鏡の中に居るのだと思うとすれば、それがとりもなおさず我々が一つの美しい線を見て『此の線』は美しい、と云うのと全然同じことだというのです。小説の中に出て来る人物の行動を追って、それに興味を感じるとすれば、それも矢張り同様です。その人物は、現実我としての自分でない事はわかり切った話ですが、現実我以外に、或いは可能性として吾人自身の奥にねむっていた、或いはやや頭を擡[もた]げかけて不知不識の間に吾人の意識の表面の薄皮のすぐ真下のところに既に隠然たる勢力を張って待ち構えていた、その他凡ゆる局面を以て吾人の現実我と対抗して何等かの形で緊張していた『非現実自我』、或いは『理想自我』かも知れませんが、とにかくそうした何等かの自我版図内に於ける処女地帯か何かを認めるとするならば、その作中の人物こそは、苟[いや]しくもそれが吾人に気に入り理解される限り、端的に『吾人自身』の実現されたものであるという事ができる。現実の吾人の中では、政党の地盤関係や階級の重なり方や、その他各種の勢力の拮抗が宜しきを得ているために、なかなか徹底した一側がぐんと進出することが許されない。健全なる現実我は必ず俗物です。思い切ったことは、憧憬されるだけで、実現はなかなか出来ない。ところが小説や映画の中ではそれが出来る。親友を救って自分はその犠牲として斃れることも出来れば、思い切りあばれ廻って、兼々気に喰わないと思っていた奴を片っぱしから殺して廻ることも出来る。うんと人を斬って見たいと思ったら、満洲へ匪賊討伐に行かなくたって、其の辺の映画館へ行けばいくらでも斬れる。『あれは役者が斬っているの、おれが斬っているわけではない』などと思っただけではいけません。完全にあなたが斬っているのです。そのためにわざわざ二十分も三十分もかかって貴君というものを銀幕の中へ吸い込み吸い込んで、さてもう十分に貴君を銀幕の中へ吸い込んで、見物席のガタ椅子の上にはもう実際的には誰もいない、よほど機会か薬か何かを使って厳密に科学的に調べて見れば或いは或いは極く稀薄な分量の現実我が多少椅子の上に発見されるかも知れないが、それとて、懐中へ手をつっ込んで財布を盗られても気がつかない位だから、如何に微量の『現実』我であるかがわかる。理想我のお留守番を受け給わっている現実我なんてものは実に頼りないもので、写真に撮ったって普通の感光版には感じないかも知れない。写真によく写りの悪いのがあるが、あれはきと何か斯ういう場合だったに違いない。

とまあ云ったような訳です。Lipps の反映再帰美学は、西洋人という再帰癖の強い、独白で自分に向って *Du* というほど再帰マニーの徹底した人種の勿論考えそうなことであって、好い議論にはちがいないが、そうした議論の起るわけは、やはり筆者の度々いう『現象ヨーロッパ』というものの特殊形態から極く自然に生えて出た一つの花であるにすぎないということがわかりましょう。われわれ東洋人としては、それらの個々現象をも取り入れると同時に、もっと大きな現象ヨーロッパというものに哲眼を見据えることが肝要です。筆者の考える所によれば、Kant の *Apriorismus* にも、Hegel の歴史観にも、この再帰癖 (*Reflexibilitätsprinzip*) というものが根底ではないにしても少くともヨーロッパに特殊な習癖をなして反映している如く感ぜられます。Immanenz, *Apriorismus*, *Idealismus* といったような大きな特徴づけと同時に、こうした実際の方面からもヨーロッパ現象を観ると面白いのではないのでしょうか？

前述の独白の *Du* と同じ意味に於て、極く何でも無い事だが非常に参考になる事の一つ付記しておきます。仏国十七世紀の喜劇作家 Molière の作ったものに *Amphitryon* と言う芝居がある。(原作は Kleist の独訳によっても有名です) その中で、有名な場ですが、すぐ最初のところで、将軍 *Amphitryon* の僕 *Sganarelle* が主人より一足先に妃のところへかえって来て、入口のところで自分と同じ顔をし自分と同じ服装をした *Merkur* 神が門に見張りをしている所にぶつかる面白い局面がある。*Merkur* 神は、*Jupiter* 神が今妃の所へ将軍 *Amphitryon* の姿に化けて密会に来ている最中なので、神の使たる役柄で、自分もやはり将軍の下僕 *Sganarelle* に化けて来ているのです。そこへ本物の *Sganarelle*

が来るのだから、何だか妙なことになる。其処をモリエール独特の妙な会話で、Merkurの方が、本物のSganarelleに向って『おれの方が本当のお前なので、お前の方は本当のおまえじゃない』ということの理路整然と証明して聴かせる。馬鹿者のスガナレルは、最初は、そんな筈はないと云って頑張っているが、聴いている中に段々と云いまくられて、遂には納得.....ではないにしても、すっかり説き伏せられてしまうという滑稽です。-----我々としての実感をいうと、この滑稽には西洋人一流の分析的飛躍がある。日本人には、殊に日本の大衆にはこうした飛躍が共に出来ないから、うっかりすると其の「むちゃくちゃ加減」という面白ろさが何処まで実感で受け入れられるかは甚だ疑問です。つまり日本人はまだそんな無茶苦茶を無精に面白ろがるための前提たる『日常意識』に於ける再帰性や抽象性の小皺が脳の中にまだ寄っていないだろうと思います。-----ところがモリエールは、あっちでは、随分以前のものであり、且つ又大衆性百パーセントのものなのですが。

またモリエールと云えば、例のL'Avare(守銭奴)の中に、けちんぼ爺が金箱を盗まれてあわて出すところがありますが、あすこの所で、「その辺の奴が片っ端から犯人のように思われる.....」という考え方まではよろしいが、扱て[さて]その次に『こうなるとモウ世界中の誰にも信用できぬ、そうだ、斯う云っている乃公[だいこう]自身ですら、うっかり心を許したら乃公自身の金箱をぬすむかも知れない!』などと云う。云うばかりではない、狂わんばかりに周章て出したとたん自分で自分の襟元をつかんで、『やい、貴様が盗ったんだろう!』と云って、それから我にかえて『おっと、これはおれ自身だった!』なんて事を云って見物を笑わせる.....

微妙な感じの問題で、脳味噌の小皺の一分一厘の長さの詮索になるけれども、日本人の冗談だったらとても茲までは行き得ないと思うがどうでしょう。ごくあやふやな記憶だが、此のL'Avareを焼きなおして作ったらしい例の(確か紅葉山人?) "夏小袖" とかいう新派喜劇にも、こうした無茶なところ(実はこれがあっちでは一番受ける所なんだが)はたしか省いてあったような気がします。もっとも翻案を読んだわけではなくて、実演を見ただけだからたしかな事は覚えていませんが。-----省いてあるとすれば、これは却々[なかなか]我国の大衆を知り浅草を知るものです。

そしてこれら凡ての現象に根底をなす国民性の研究、これが筆者は非常に面白いと思うのです。

第三講

Warum haben Sie mir das getan? rief er. Es könnte jetzt alles überstanden sein, und ich hätte Ruhe vor mir selbst. (P. Heyse : David und Jonathan)

『どうしてこんな事をして下さったのです!』と彼は云った。
『あれでもうサッパリと片がついて、われとわが気持を持て余す必要がなくなっていたのに。』

これは、自身で自分の気持ちをもて余した男が、投身自殺を囚って、救けてくれた人に向って恨みごとを云っているところです。

『われとわが情熱を持て余す』ということは vor sich selbst Ruhe haben [自分自身の手をのがれる; 自分自身の急迫の手を免れる; 自分自身を御免蒙る]という句の中に自然に含まれています。債権者の手をのがれたり (vor seinen Gläubigern Ruhe haben) 質問攻めの厄をのがれたり (vor den lästigen Fragern seine Ruhe haben) するのと同じように、自分自身というものを一つの厄と見て、それをのがれる、即ち死ぬことです。

この個所で問題になっている男は、文学創作を志して、さる大家から駄目だと宣告され、自分でもつくづく駄目なことが認識されたが、意馬心猿[いばしんえん]は必ずしも認識には屈服せず、相変らず野心が躍って仕様がな、-----しかも『認識の明瞭な自分』の方は、そうした意欲の空転がわれながら五月蠅くて五月蠅くて仕様がな-----

そこで遂に自殺するのですが、此の場合は、『意欲と感情の主体』としての自我と、それを傍観している『認識の主体としての自我』とが対立抗争している。どっちが現実我でどっちが非現実我[或いは理想我]かという問題は、やかましく言い出せば単なる解釈法の問題になってしまうでしょうが、しかしまあ誰でも認めそうな常識論で裁くとすれば、やはりまあ『意馬心猿』の方が現実我であって、『分別』の方が非現実我だということになって来るのではないのでしょうか。けれども、此の場合はそんな Schema はまあ必ずしもあてはめなくても好い。如何となれば、二つの自我が殆ど相伯仲する勢力を得るに至って所謂自己分裂という状態になり、謂わばスペインの内乱のようになってくれば、これはもはや只今までに扱った形態とはちがって、両方とも公式の政府、すなわち両方とも『現実の自我』と云って差支えありませんまい。

Existenz という現象は、この局面形態に至って実に断然面白くなって来たではありませんか。たとえば、こうした分裂局面にある人に対する『親切』という奴は、よほどよく考えて尽さないで、反って後で恨まれることになる。命を助けてやってあとで小言を云われることになる。

事柄の註釈のために、これは仏蘭西語ですが、非常に面白い例を並行的に掲げておきます。詳しい話は省きますが、次に挙げるのは Racine の *Andromaque* という悲劇で、*Hermione* という女の台詞です。*Hermione* は *Pyrrhus* 王を恋している。ところが王は自分を愛しない。*Hermione* は怒って、自分に言い寄る *Oreste* に命じて王を殺させる。*Oreste* は *Hermione* のためには何でもするから、殊に恋の仇ではあるし、早速 *Pyrrhus* を殺して、手柄顔をしながら其事を *Hermione* に報告する。すると *Hermione* は.....豈凶らんや、悦ばないで *Oreste* を呪う：

Ah ! fallait-il en croire une amante insensée ?
Ne devais-tu pas lire au fond de ma pensée ?
Et ne yais-tu pas, dans mes emportements,
Que mon coeur démentait ma bouche à tous moments ?
Quand je l'aurais voulu, fallait-il y souscrire ?
N'as-tu pas dû cent fois te faire redire ?
(Racine, *Andromaque*, V. III.)

気の触れた恋の奴に耳を貸すとは何事じゃ？
わらわのまことの心を読み損ねたか？
逆上の余り心にもない事を口走った
口と肚[はら]との喰い違いが見えなんだか？
よし妾が強いたとて、うけがうとは何事じゃ？
何故念のためにももの百度も聞き直さなんだ？

『何故念のためにももの百度も聞き直さなんだ？』というのが実に面白い言草です。既に一度念を押したただけでも *Hermione* は辛抱を切らして『一度云ったらわかっている！』と云ってどなりつけた癖に、後になって斯ういう事をいう.....*Oreste* としてはまったくどうして好いか訳がわからない。

いわゆる *Grenzsituation* [境界局面] というのはみんな微妙な危機を持っている。本問題に帰りますが、*vor sich selbst Ruhe haben* という語句は、これは成句や熟語ではありませんから、他に色々面白い云い方がありましょう。*von sich selbst verschont bleiben* [自分自身をまぬがれる]、*vor sich selbst Reißaus nehmen* 又は *vor sich selbst die Flucht ergreifen* [自分自身に怖れをなしてスタコラと逃げ出す]、*sich von sich selbst befreien* [自分を自分から解放する]、*sich selbst aus dem Wege gehen* [自分自身を忌避する]、*sich selbst los werden* [自分自身をお払い箱にする]、その他いろいろと考えられましょう。

『自己分裂を惹起している』ということは、*mit sich selbst entzweit sein* ; *mit sich selbst hadern* ; *mit sich selbst uneinig* [又は *veruneint, zerfallen*] *sein* ; 又は面白く云うならば *mit sich selbst gespannt sein* とか *mit sich selbst auf gespanntem Fuße leben* [對自己関係が緊張

している]などとも云えます。云えますではない。よく云うのです。神を恨み我身を恨んで二六時中いらいらしていると云ったようなことを mit Gott und sich selbst in ewigem Haer liegen などと云うのは、殆んど常用句になっているようです。

ちょっとまた Anthropologie の立場から Bemerkung を挿[はさ]むとすれば、こうした自己分裂の現象は、日本人の場合には、全然無いとは云えないが、あっても其の深刻さが大したものじゃなくて、おんぼりしている。ところが、西洋では、用語としても又事実としても非常に多い。むしろ眼にあまると云って好い。これは、日本人には謂わばまだ屈折したり再帰したり分裂するほど強烈な『自我』が生じていないのではないのでしょうか。-----此の問題に於ても再帰現象というやつは自我の独立性の強度を計るバロメーターでしょう。

自我が拡大されれば、そこには必ず屈折、再帰という現象が起る筈です。人間の頭は結局小さな西瓜ほどの容積しかないのだから、中味が伸びてくれば、まさか鼻から表へ出るわけにも行かないから、そうしたって屈折して畳まれて襞が出来て折目がつくのは必至の勢だ。折れ目がつけば、自己その者の表面と自己そのものの表面とが一点に会して、そこに自我と自我との間にパチパチと火花が散る。これが再帰です。だから再帰は頭の発達の度のバロメーターです。

変な譬[たとえ]だけれども、実際そうではないでしょうか？

Endlich schien er mit sich selbst ins reine gekommen zu sein und näherte sich herzlich dem Unglückshause.

(Heyse : Nino und Maso.)

遂に彼は肚[はら]を決めたらしく、敢然として其の不祥の家屋に近づいた。

「肚を決めた」という訳語は、日本語はまあ斯ういう時にそう云う事を云うから使ったのですが、mit sich selbst ins reine kommen という句の再帰哲学的な味は、「肚を決めた」では本当はちょっと表現されていない。茲はまあ強いて西洋人の脳の小皺まで表現する必要のある個所ではないから、実際はまあ肚を決めたでも好いでしょうが.....

つまり、自分で自分の気持の混沌たる政局を收拾して(der Situation Herr werden)、宇垣さんなら宇垣さんに組閣の大命が降るといった様な関係のことを mit sich selbst ins Reine kommen [自分自身に対してはっきりした気持が生ずる]と思えば宜しい。謂わば對自己関係の政局收拾、一個人内の国体明徴です。

つまり此処に問題になっている男は、欲するともなく欲せざるともなく問題の家に近づいていたのです。Er kämpfte mit sich selbst [彼は彼自身と闘っていた]というほど露骨にはっきりした二つの分裂があったわけではないが、少くとも Er war mit sich selbst noch nicht im Klaren [かれはまだ自分自身の気持に就て確信が持てなかった]のです。或いは Er war sich über sein eigenes Wollen noch nicht klar 又は im Klaren だったのです。そう云う事は珍らしくない。例えば酒癖のある男が酒場の入口へ来て思わず自分で吃驚[びっくり]するなんてことは有り勝ちです。『今日は行かない、今日は絶対に行かない』と決心しながら、しかも足は酒場の方へ向いて歩いている。勿論自分自身の良心に対する口実はもちろん出来ているので、『酒場へ這入るわけではないが、前を通る分には差し支えあるまい』なんて事を空々しくも sich selbst vorschützen [自分自身に向けて口実を構え]ている。その口実を聞いている方の自我は、勿論全然本気でそれを信じているわけではない、『そんな事を言ったって、なあに、どうせ前へ来りゃあ這入るにきまっている.....』なんて云って、殆んど真面目に相手にしていない。然し、不思議なことには笑わない。他人がそんな事を云ったら頭っから笑って返すところだが、なんせ自分自身が極く近くにいて云うことだから、近くのものに対しては誰でも気が弱いとしたもので、真面目な顔をして好意的沈黙を守っている。そうすると、酒を呑みたい方の自我は、相手の自我の沈黙を勝手に有利に解釈して、反駁しないというのは即ち承認したのだ、そ

れで己も安心した.....てんでもって、大いに勇氣を得て、敢然として酒場の入口まで突進してしまう。-----いよいよ入口に立つというと、こんどは良心の方が此の余りににも露骨なる新局面に面してびっくりしてしまう。『君、まさか這入るつもりじゃないだろうね?』と云って、真青な顔をして酒呑みの自我をきめつける、きめつけられた方でも、斯うなればもう占めたものだから、悠々として良心の説得にかかる。『まさか這入るつもりじゃないさ。少くとも這入るつもりで来たと言われては吾輩も立つ瀬がない。それに着た事に関しては君にも責任の半分がある筈だからね。しかし.....しかしだ、しかしこうして愈々入口まで来てしまった只今となってはだ.....』てな事になって来る。勿論良心の自我だって、こんな狡猾手段においそれと乗るほどお人好くはないが、なにしろ入口の前まで来てしまったという不可抗力的(?)新事態の出現によって状勢はもう根本的に変わって来ているから、遂にはもう兎や角云うだけ野暮になって、結局事実の力に押されて暖簾をくぐるようになってしまう.....

最後のところは、もっと現象に忠実に描写する必要があるかも知れません。即ち、良心的自我の方は、決して不精無精のままで渋々暖簾をくぐってしまうのではないのです。それは恰も議会在宣戦を議決した後の瞬間です。国内で検討を尽すというのと、対外的に一致の行動を取るというのとはおのずから別個の問題です。たとえ今の今まで猛烈に反対していた党派と雖も、玉粹して愈々宣戦布告となった暁は、決して渋い顔や苦い顔をして中途半端に引き摺られて行っではいけない。対外的には挙国一致の行動を取って、むしろ積極的に政府を支持し、宣戦布告をして榮あらしむることに努める。暖簾をくぐる心理も正にそれです。玉粹した良心自我は潔く自説を撤回する。『吾輩は負けた、よし、万事君に委したから大いにやって呉れ給え!』と云って、むしろ大いに前途を祝するでしょう。そして五尺の図体は肩で風を切って颯爽と暖簾を潜るという事になるでしょう。

kam mit sich selbst ins Reine というのも、内部関係を詳しく云うならば、或いはこうした局面を通過したのかも知れないのです。

以上の心理分析は決して面白くしたわけではありません。まったく此の通りなのです。-----まるで二人の親友が互いに問答しながら酒場へ這入って行くように見えますが、よく考えて見ると、二人の親友の場合と一個人の頭の中の場合と、関係はちっとも違わないのではありませんまいか? すぐなくとも、一個人の頭の中に起る現象を、斯くの如くに二つの党派に分解して表現するのは、決して単なる **Laune** ではない。それはドイツ人の言語本能がドイツ人自身の **Existenz** 現象に対して不知不識の間におのずと妥当なる解釈を施し、**phänomengetreue Analyse** を試みているのではありませんまいか?

日本語にも勿論この種の解釈が全然現れていないとは云われません。われを忘れて云々するとか、われとわが身に愛想が尽きるとか、自暴自棄とか、その他、分裂があまりにも露骨で、どんな鈍い男でも流石に再帰的対立を感じないではいられないような局面に対しては勿論人間認識の自然の趨向としておのずからそうした言い廻しが多少芽生えています。しかしそれらは極く少数で、しかも極く幼稚な型ばかりです。『言語表現の欠如』は『事実そのものの欠如』を雄弁に物語ります。言[こと]は事[こと]なりです。再帰語法の貧弱は **Existenz** そのものの鈍重を裏書しています。東洋人の頭はまだ **existieren** していない。 **vegetieren** しているにすぎない。-----**Existenz**[動存]は即ち **Vegetation**[停存]の対立概念なのであります。

植物は靈肉ともに安定し、停存している。『動』物は、肉体だけ安定を脱して活存し初めているが、靈はなお **vegetieren** をつづけている。人間に至って初めて靈が根底から安定を失って **existieren** し初めるのです。だから凡ゆる『動』物中、動の名に最も相応しいのは人間であると云って好い。

その人間の中でも東洋人と西洋人とを比べると、靈の安定にまた格段の相違がある。動物が荷車で、日本人が自転車だとすれば、西洋人は飛行機というところまで行っている。-----だから精神の安定という点から考えれば、自転車も飛行機も『進むという事によってのみ安定を保つことが出来る(これが **Existenz** の意義!)] という点では同じであるけれども(即ち東洋人も西洋人やはり結局人間なのだけれども)、その安定を得んがた

めの操作、此の幸福を得んがための内的努力、此の安住を得んがための再帰的緊張には到底日を同じうして語るべからざるものがある。つまり、同じ安定でも、飛行機の方は命がけの安定なんです。

だから、自転車に乗っている男の『そもそも乗物なるもの』に対する観念と、飛行士の『乗物観』との間には、根本的な相違、本質的な披[ひら]きが生じて来るのはやむを得ない。この意味に於て、度々引用する Heidegger の哲学は、かれら西洋人にとっては或いはそう大してやかましく云われるほど新しいものでないかも知れないが、我々東洋人にとっては『解釈形態から出立して実物そのものの姿態を探る』という意味に於て、非常な意義を帯びて来るのであります。如何となれば、Heidegger の哲学は、此の Existenz なる現象の根本をなす『動』という姿 (Zeitlichkeit) 動相の裡に閃く不安感 (Angst)、それから前述の『進即是安』の相 (Sorge-Struktur)、それから其の時々安定感 (das Man) の相、要するにこれらの『相』 (Sein) と『動』 (Zeit) とに対して、動相最も酷なるドイツ人自身の彼自身の中に於ける独白、すなわち再帰的反映であるが故に非常な意義を持って来ると思うのであります。

Unter den Männern des Wirtschaftslebens, deren schwierige Probleme ich tagtäglich verfolgte, kenne ich viele, die beseelt sind von zähem Glauben, und die eines Tages neues Licht diesem Europa bringen können, das auf der Suche nach sich selber in die Irre geht. (aus der Zeitung)

私も相当実業界に人物を知っており、またそれらの人たちが衝に当たっている諸種の諸問題にも多大の関心を以て絶えず注意を払っている者であるが、それらの中には不撓不屈の確信に燃え、此の己れ自身を求めつゝ迷路にさまよっているヨーロッパのために他日新たな黎明を齎らすことの出来る人が決して少なくないと思っている。

Auf der Suche nach.....は、たとえばよく書物の標題などに出て来る「.....を求めて」というやつです。

これは、第一講に於て述べた sich selbst fremd, entfremdet、或いは sich selbst fehlen 等と関係して考えられますが、こんどはその現象を多少ちがった角度から眺めて行こうと思います。こんどは、自分が自分自身を紛失してしまったり、自分が自分自身を再び発見したり、要するに我々人間が如何なる種類の自我相を指して『本然の自我』と考え、如何なる自我相を指して『仮の自我』と考えているかということが、-----というよりはむしろ、そもそもそうした区別を設けたくなくなるという其の事がなお一段と深い意味を帯びて来て、いわゆる Existenz の解釈に尚お一層の深さと幅を提供します。

自己を求める (sich selbst suchen) とか、自己を見出す (sich selbst finden) とかいうと、ちょっと何か新たなものを見つけるようですが、これは例えば zu sich kommen [己自身に立帰る] 或いは auf sich selbst zurückkommen (己自身に向って帰って来る) 等で明らかなるごとく今までに無かったものを改めて発見するの謂ではなくて、失われたるものを復び取り戻す、すなわち『元へ帰って来る』という考え方が基礎をなしている点に注目しなければなりません。『再帰』という名称は、これらの考え方に於て、愈々事実的な意味を帯びて来るのです。

勿論これは単なる考え方の問題です。良心の動きのことを『里心』と呼び、『黄金時代』を過去に置いて考え、地上の樂園を人間史の『出立点』として考え、我々はすべてそれから次第に遠ざかりつつあるものと見なして、そしてしかも意識の進化発展の真諦をば或種の『失地回復』、『本然相の再獲得』と見立てるのは、あらゆる民族のあらゆる文化段階に現れて来るごく自然な考え方であり、その反対、すなわち昔は混沌と分裂と野蛮そのものであったが、未来の彼方に至って神代が控えているといったような神話は余り聞きません。-----けれどもこれは単に考え方の問題です。人間というものは、おのれ自身をそういう風に考えるものだ、というのが此の現象の真諦でしょう。だから、神

代や黄金時代や本然相を探るためには何の証拠にもならないが、人間というものは己自身の本然相をそういう風に過去の的に再帰的に考えるものだと云う此の解釈相それ自体は直ちに以て人間そのものの本然相 (das An-sich) でなければなりません。本然相という意味は少々従来とはちがって来るかも知れませんが、そもそも物に本然相なるものを設けて考えるとすれば、これこそ最も現象に忠なる本然相ではありますまいか。

要するに、結局は考え方の一形態ではありますけれども、とにかく一度迷っていたものが改めて自分自身という里に帰って来るという思想が、人間の人間自身に対する解釈の非常に重要な側を成しているという事実は見逃し得ません。しかも、その迷っているというのが、ちょっと一時の現象としてではなくて、これが抑々人生そのものの常態であるという解釈が生じて来るのが面白い。即ち『迷う』という事を以て Existenz の根本相の一つと見るのです。

**没自相の表現として
見た sich ver- 動詞**

この没自相 (Selbstverlorenheit) たるものは、此の再帰動詞という文法現象に於ても一つの明確なる意味形態となって現れている。しかもその意味形態は、一つのはっきりした文法形態まで発達している。これは再帰現象研究の幅員を取る上に一つの重要な事実であろうと思えますから、特に詳記して注目を惹いて置きたい。それは何かというに sich in.....ver- + 動詞という此の構造です。(in は必ずしも in とは限りませんが、in が多いことは事実です) たとえば『或事に没頭・耽溺・沈湎する』ことを sich in etwas vertiefen というのと同じように、或人に惚れることを sich in jemanden verlieben という。悪魔に身を売ることを sich dem Teufel verschreiben という等です。これらの sich ver- はもう一般に認められた型を成していますから、自由にその時々のもを造ることさえ出来ます。

sich ver- には先ず第一に『誤る』又は『迷う』の意味があります。

sich verrechnen	誤算する	sich versprechen	言い誤る
sich verschreiben	書き誤る	sich vergreifen	取り違える
sich verhören	聞き違える	sich versehen	見誤る
sich vergeben	出し損なう(釣銭等)		
sich verlaufen	路を誤る	sich verirren	迷う
sich verfahren	針路を誤る	sich verfliegen	同(飛行機)
sich verlegen	寝ちがえる	sich vertreten	踏み違える

ところが、『誤る』から『迷う』への移り向きが、Existenz 現象の表現として用いられる際には、なおも一段と飛躍して、sich in (又は an) etwas verlieren の意、即ち、或る対象の中へ迷い込んでしまっ、その中に融けて、没して、隠れて、散らばって、捕われて、もはや元へは帰れなくなる、即ち自分自身の本然の面目を没却してしまうという意味が生じて来ます。早い話が、『惚れる』という動詞が全部それです:

sich in jemanden verlieben.	sich in jemanden vernurren.
sich in jemanden verschießen.	sich in jemanden vergucken.
sich in jemanden vergaffen.	

つまり、ドイツ人の考え方によると、単に愛するのと『惚れる』のとは大変ちがうのです。愛するというのは、己自身の立場の安定を失することなく、足許が狂わない限りに於て心の手をさしのべて相手を抱き寄せることなのですが、ほれるというのは、重心そのものが相手の方へ移ってしまっ、(即ち実質の自我は自我以外に乗り出してしまっ)あとには藻ぬけの殻の自我が残ること、即ち足許の自我を没却してしまうことです。たとえば sich vergaffen ならば、逐語的に云うと『自我を』(sich)『見惚れ』(gaffen)『失う』(ver-) ことです。sich fortgaffen, sich hingaffen, sich hinweggaffen, sich zergaffen, sich entgaffen, sich dahingaffen の意です。(つまり結局は私がドイツ語の特性として数度指摘したことのある Lativum "搬動語法" の現象)

ただ **zer-** と **ver-** とは動きの様子がちがいます。 **zer-** は四方八方に散らばってしまうことですが、此の場合の **ver-** は何処か一定の場所乃至対象の中へ溶け込み、纏れ込み、迷い込み、こんがらがり込んで、或いは姿を没し、或いは執[とら]われ、或いは渾一体になってしまつて、どうにも收拾がつかなくなる.....というのでなければなりません。

日本語に『云々し呆[ほう]ける』という巧いことばがある。これです。小供が遊び呆ける、おやじが飲み呆ける、学者が読み呆ける、.....だから、「惚れる」というのは「愛する」のではなくて「愛し呆ける」のです。

- [1] Was hast du da in Höhlen, Felsenritzen / Dich wie ein Schuhu zu versitzen? [Faust, I.]

みみずくじゃあるまいし、こんな洞穴や岩の割れ目の中につくねん座り呆けて、一たいどうなさろうと云うのです。

- [2] Aber als sie bei hellem Tageslicht erwachte, fand sie, daß sie sich verschlafen hatte. [W. v. Polenz, Wald.]

眼がさめると、あたりはもう真昼中で、彼女はつい寝すごしてしまったことに気がついた。

- [3] Die Kindererziehung darf sich nie ins Kleine und Äußerliche verlaufen. [Zeitung, 1936.]

児童教育は、如何なる際と雖も決して些細な外形的な事柄に拘泥して本義を没却してはならないのである。

- [4] Aber ich verplaudere mich. Ich habe leider alle Hände voll Arbeit !
[Bauernfeld : Das Liebesprotokoll, II.]

おっとどっこい、長話はまあこれ位にしておきましょう。実は用事が山ほど控えているのです。

- [5] Nur wenn er für sich war und sich in eigene Gedanken vergrübeln konnte, gelang es ihm, zu sagen, was er selbst in seiner Seele hegte und was eigene Überzeugung war. [H. Stadelmann : Messalina, II.]

渠[かれ]は、ただ、自分一人きりでいて、じつと自分なりの考えに没頭できる時に限って、真に自己の抱懐する所を披瀝し真の所信を表白することができるのであった。

- [6] Ich habe mich aber nun so in die Idee verrannt, daß ich mich allen vernünftigen Gründen gegenüber versperre. [Zeitung, 1936.]

ところが僕はもう一途にそうしようと自分で思い込んでしまっていたものだから、はたから何と異見されても全然受けつける気になれなかった。

- [7] So ganz und blind ist er in seiner Wut, und verbeißt sich nur immer tiefer in seinen boshafte Gedanken. [Otto Ludwig, Die Heiteretei]

あの男はもう後先の見境もなくかんかんに怒ってしまっているから、日に日にこじれて行く一方だ。

- [8] Aus einem Extrem verfiel man in Deutschland ins andere : man erklärte die Ideen als Phrasen und Mittel einer machiavellistischen Politik, und

in dem gerade im Ausland viel gelesenen Nietzsche verstieg sich der Machtgedanke in der Lehre vom Herren- und Übermenschen geradezu ins Krankhafte. [Ph. Hilterbrandt : Das europäische Verhängnis.]

独逸の思想は極端から極端へと趨[はし]った。観念は空辞である、マキアヴェリ主義的政策を遂行するための手段に他ならぬ、とまで公言するものが生じて来、殊に外国で一番多く読まれているニイチェの思想に於ては、問題の強力主義は例の支配者型・超人と云う考え方となつて、殆んど病的ともいうべき程度に亢進してしまつたのである。

[9] Ei, Signor Antonio ! Signor Antonio ! wie habt Ihr Euch verguckt in die schönen Augen der Dogaresse ! [E. T. A. Hoffmann, Doge und Dogaresse.]

これこれ、アントニオ殿アントニオ殿、公妃[こうひ]殿下のお美しい眼差しに、これはまたきつうのぼせておしまいなされたものじゃ喃[のう]

[10] Waren doch die Frauenzimmer ohne Ausnahme in den schönen Mann bis über die Ohren verschossen. [Spielhagen : Alles fließt.]

それもその筈、婦人連はまるで申し合せたように此の美男子にすっかり参つてしまつていたのだから。

これらの動詞は、最後の例にある通り、同様の意味形態でもつて、形容詞として用いることも出来ます。ein verliebter Kerl (恋の奴)、ein verschlafenes Gesicht (寝とぼけた顔)、ein verbissener Stolz (えこじ、片意地)、ein verlesenes Fräulein ("本に読まれてしまった"令嬢)、ein verträumter Dichter (夢想に呆けた詩人)、ein verspieltes Kind (遊びに夢中になっている子供)、ein verstiegener Idealismus (雲表に飛躍し去ってしまったような没常識な観念主義)、eine verfahrenene Situation (袋路へ乗り入れてしまった、打開不可能な、行きづまりの、動きの取れぬ局面)等々です。

これらの考え方は、一たい Existenz の如何なる相を反映しているのでしょうか？如何となれば、既に只今まで考察し来つた諸種の再帰語法が翕然[きゅうぜん]として Existenz 現象の動相を表現していることを想えば、これらも亦何等かの意味に於て Existenz の一動相を表すであろうことは期せずして推知されるからです。

曩[さき]に私は、妙な例だが自転車と飛行機の譬えを以て、『前進によってしか安定を求める方法がない』ということ Existenz の一相として指摘し、『進即是安・安側是進』を以て人間現象の根本相だと云いました。然るに、『進む』という事は得て『迷う』ということになり易い、否大抵またそうなのであります。(此の『得て.....し易く、また大抵そうである』ということ Heidegger は zunächst und zumeist と云つて云い表しています。Aristoteles 等の *πρωτως και μαλιστα*)-----いな、Existenz の相に徹した Goethe は、Faust でもつて、迷うということ『が』直ちに以て進んでいることの証左でアルトすら極言しているではありませんか！

Es irrt der Mensch, solange er strebt.

とは云え、ここが面白いと思うのですが、『迷』が如何に『進』の『進』たる所以であるとは云え、それが真の『安』でないということは吾人の本姓がこれを絶えず耳元で囁いて止まない。『吾人』が吾人のどん底から吾人に向つて囁く、(Heidegger は、吾人が吾人の耳元で "黙る" といったようなことを云います)-----そうした本然相のことを、たとえ仏心と呼ぼうと、良心と呼ぼうと、里心と呼ぼうと、はた又均衡本能と呼ぼうと、名はどうでもよろしいが、とにかくそうした一つの立場が存在する事は事実です。此の立場からいふと、Existenz の大抵の相・局面・姿態はすべて仏教の謂ゆる転倒錯誤の人間相であつて、これがすべて只今申しているような sich ver- 云々という形式で表現されるというわけです。では此の ver- と云う非分離動詞は一たいどう云う前綴でしょう？此の場合の意味形態としては一たいどう云う解釈を加えたならばよいのでしょうか

か？

ver- とは、簡単に云うならば『変なところへ来てしまっている』という表現です。『なんだか多少見当が狂って来ているな』という意味です。『本当はこんな所へ来る筈じゃなかったのじゃないかしら？』ということです。

自我が自我自身を見失ってしまった相です。いよいよ自我を再発見しなければならぬ。auf die Suche nach sich selber の途上に発足しなければなりません。そして此の模索的再帰還元がまた新たな Existenz として Existenz 自身をさらに一段と深めることになりましょう。

此の最後の再帰という観念、従って亦 ver- [失う]という現象は、よほど Existenz の亢進した状態でないと見受けることができません。そうでしょう、また先の例で行くならば、自転車はまさか知らないうちに真逆様になって走っているということは起り得ますまいが、飛行機だと実際そう云う事があるそうですからね。

第四講

変る事によってしか安住を求めることの出来ない人間、動くことによってしか安定を保つことの出来ないように仕組まれている『現象人間』は、さて、『己自身を見出す』とか『自我を再獲得する』とか云ったところで、それがそう簡単に為し得られることでしょうか？否、むしろ『迷うのが常態である』、『自己分裂が基本形式である』という、これが『進即是安、動即是定』の相から生じて来る当然の帰趨ではありませんまいか？

とは云いながらも、人間の意識生活は、必ずしも凡ゆる瞬間に於て『遠心的』であるとは限らない。時には鎮静と休止と停滞と収縮が訪れて、心局は忽ちにして『求心的』となり、調和的となり、充足が支配し、時には内燃的、或いは寂滅的となり、恰も一時安定を得たかの如き観を呈することがあります。勿論、決して Existenz の本然性たる『動相』が歇んだわけではなく、飛行機のように推進(Heidegger の "sich entwerfen")していたものが、こんどは独楽の如く己自身を中心として廻転し始めるだけの相違であって、動相、進相にはいささかの変わりもありません。独楽は一見不動のようであるが、その不動は、動くことによって始めて維持せられている不動で、『進即是安、動即是定』の Prinzip は此の場合に於ても(ではない、此の場合に於て更に一層)妥当であります。

試みに人間意識の求心的現象の特徴的なものが如何に再帰的に表現せられるかを概観してみましょう：

Durch unsre Mitte ging er stillen Geistes,
Sich selber die Gesellschaft; nicht die Lust,
Die kindische, der Knaben zog ihn an.
(Schiller : Wallensteins Tod, IV. 2.)

仲間ともあまり口をお利きにならず、始終なにか独りで物を考えている方で、他の男の子たちのような馬鹿騒ぎはお嫌いなようでした。

Gesellschaft は『相手』のことゆえ、sich selber die Gesellschaft は、『おのれ自身の相手として』、換言するならば mit sich selbst beschäftigt ; in sich selbst versunken ; seinen eigenen Gedanken nachhängend の意です。-----大抵の人間は、ひとりきりでいて、話相手がないというと、進即是安のモーターが空転して、たとえば綱で樹につながれた飛行機のようなもので、すこぶる珍妙な局面を演ずることになる。称してこれを『退屈』というのですが、この退屈という奴が吾人自身にとって如何に苦痛なものであるかということが、人間現象の根本をなす動相を実に恐ろしきまでに間接証明しているではありませんか！たとえば、ちょっと退屈という奴の再帰的分解の例をあげると：

Ich wußte nicht, was ich aus mir selber machen sollte.
(Tieck, Der blonde Eckbert)

私は私自身の始末に困ってしまった。

Beinahe den ganzen Tag über war er sinnlos in der Stadt
herumgelaufen, wie es einem ja oft ergeht, wenn man nichts mehr
mit der Umgebung und auch mit sich selbst anzufangen weiß.
(Hans Colberg : Heimweh und Bosphorus)

身の廻りに何の変哲もなく、またわれとわが気持をどう扱って
好いか始末に窮したような時に
よくあることだが、かれは一日中
ただもう町の中をじゃんじゃん歩き廻ったのであった。

こうした再帰的解釈にはたしかに一理あるので、退屈に陥った人間という奴は、たとえ何の用もない人間と差し向いで座っているようなもので、その何の用もない相手の男というのがつまり自分自身なのです。実に皮肉じゃありませんか、元来人間という奴は、当人自身にとっては当人自身が一番可愛くもあり重要でもあるべき筈なのに、その最も重要な当人御自身とゆっくり水入らずの差し向いになるや否や、さあモウ此の野郎をどうして好いか見当がつかなくなって、ゆっくりするどころか、いらいらして、居ても立ってもいられなくなるのです。てめえのつらはモウ見慚[あ]きてる、面白ろくもねえ面だ、お茶でも呑んでサッサと帰れというわけです。随分自分自身に対して失礼しちゃうわけですが、何を申そうにも之れが Existenz の『仕組み』(Struktur)だから、こればかりはどうにもならない。

たとえば出席簿に名前をつけて貰うだけの目的で登校した学生が一時間ベンチに座っているところを考えて下さい。この人間にとっては、一分間が一時間ぐらいに感ぜられる。彼にとっては『時間』が苦痛になる。まったく『時間だけ』が苦痛になるのです。時間とは何ぞや？これが度々いう『動相』です。かれは『動相』をもてあますのです。自分自身の『動相』(Zeitlichkeit)をもてあますのです。時間(Zeit)の真諦がどうそうであることはこれによっても明らかです。もし時間の真諦が動相でなかったら彼にとって時間は斯くも苦痛にはならないでしょう。

かく、退屈という空転に陥った人間が己自身を救い得る路は二つしかありません。それは、なにか外界に関心の対象を発見するか、或いは『己自身を相手に何事かを開始するか』のどちらかです。前者は多少俗物の自個救済法であり、後者は相当己自身の中に内容を有する人間にして始めて取り得る路です。前に引用した Wallenstein の sich selbst die Gesellschaft は、この後者の場合です。

けれども、此の見方は、元来の見地からして直ぐまたぶっ毀されなければなりません。人間は、即ち、Existenz は徹頭徹尾再帰的なものであって、外界に関心が向くと云ったところで、その外界というのは実は彼自身の反映なのですから、客観的に遠心的になったからとて其の主観性と求心性とは、少し様子がかわった求心であるに過ぎず、反対にまた mit sich selbst beschäftigt とか in sich selbst versunken とか云ったところで、その sich は本当に文の主語 er と同一物なのではありません。両者とも、つまり再帰的動相の『異った現われ方』であるにすぎないわけです。

所で、只今取扱っているのは、そのうちでも後に述べた方の、『求心的』な局面の方ですが、そうした局面の再帰的表現をなお二三見て行くことにしましょう。

求心的局面の最もはっきりしたものは、満足、自足、自己満足、独立不羈、自立、自由、自給、自律、自負、自信等の状態で、これらがすでに漢字の表現でも『自』という字を用いて多少再帰的に解釈しているのでもわかりますがドイツ語ではなおのこと sich という解釈が強調されます。mit sich selbst zufrieden sein, sich selber gefallen, sich selbst leben 等々等々。

Es gibt rings um ihn viel materielle und sittliche Not. Aber er besitzt die Fähigkeit, davor seine Augen zu verschließen. Er ist also mit sich und der Welt, so wie sie ist, sehr wohl zufrieden.

(Lipps ; Die ethischen Grundfragen. III.)

彼の周囲には、物質的にも精神的にも、悩んである人がかなり多くいる。けれども彼はそれらの事実に対して眼を閉ざすことができる。つまり、彼は自分自身に対しても、また現在見る通りの外界に対してもすっかり満足しきっているのである。

別に特に『自己満足』というほどの再帰性を持った場合ではなくても、とにかく『満足』一般を『自己満足』と見ることが出来るという点には注目を要します。たとえばそれが謂わゆる精神的満足ではなくてもです。旨いものを食ってああおいしかったと思って腹をさする瞬間ですら、あまり再帰的屈折性の発達していない野蛮人であれば勿論『私はこの食物に対して満足である』と考えるかも知れないが、多少たりとも主観の屈折性をもった文明人であれば、それは決して『食物を』欣[よろこ]んでいるのではなくて、食物によって鎮められ安定を実現した『自分自身の状態を』欣んでいるのだという事実を感じ、感ずるばかりではなくまたそう表現することになるのは極く自然です。官能の満足すらそうですから、精神的満足に至っては勿論すべて再帰性を有し、再帰的解釈が最も自然です。

日常会話に於ても、たとえば『どうです、日本は気に入りましたか?』と云って問うような時には、*Nun, wie gefällt es Ihnen in Japan?* というでしょう。*Wie gefällt Ihnen Japan* とも云えないことはないでしょうが、それではまるで特に日本を *Thema* として論じているようで、ちょっと不適當です。問題は日本を論ずるのではない。問題は相手の気持ちを心配してやる所にあるのです。つまり相手の *Existenz* の模様に関心を置いて問うのです。その他、『彼女は新調の着物が大変気に入っている』*Sie gefällt sich sehr wohl in ihrem neuen Kleide* 等。

満足と同じような求心的局面が、たとえば本講の最初に挙げた *sich selbst die Gesellschaft* 等の『自給自足』(*Autarkie*)の状態ですが、参考のためになおそうした再帰的表現の例を挙げると:

Er hat den Dienst verlassen, um ganz sich selbst zu leben.

(Kotzebue : Menschenhaß u. Reue. II. 2.)

かれは悠々自適の生活を送らんがために職を退いた。

sich は此の際は三格です。*leben* はつまり *sich widmen* (身を捧げる) というのと略同じで、*der Kunst leben* (芸術に身を捧げる) 等、三格と併に用いることは普通になっています。

Und wie eine Lieblings-Melodie, ehe wir uns versehen, auf einmal dem tiefsten Gehör leise hervortritt, so wiederholte sich jene zarte Mitteilung in der stillen, sich selbst angehörigen Seele.

(Goethe : Wilhelm Meisters Wanderjahre, III. 5.)

恰も、好きなメロディが、無意識の裡に忽ち心の奥の聴覚に仄かに聞こえて来ることがあるように、こうしてひっそりと静ま

りかえって独りきりになった心の中には、例のきわどいことば
がまたもや思い浮かんでくるのであった。

他人と面している時には、吾人の意識は本当に吾人自身の意識ではない。交際心理、対他心理という奴は吾人の真の自我に沈黙を命ずる。In der Gegenwart der andern gehören wir uns selbst nicht.-----ひとりきりになってはじめて吾人自身の考えを考えることが出来る。-----たとえば、たとえどんな悪人でも、相手と面と向っている真中に、『此の人間を裏切ってやろう』という計画をそう徹底的に、細かに、手落ちのないように詳しく考えられるものではない。本当に相手を裏切らんがためには、まず何よりも相手の人間の面をのがれて自分一人きりになって物を考えることが必要です。-----それと反対に、全然交際心理そのものから生れて来る行動、没自我的、対他意識的、社会的行動、即ちたとえば人の気に入ろうとか、大いに雄弁を振って煙に巻いてやろうとか云ったような事をねらう時には、sich selbst angehörig な孤独の瞬間に万全の準備をして行ったって何の役にも立たないで、むしろ相手と顔を合わせた時の其の場の意識から出立して即興的にやっつけた方が大抵の場合成功する。以て個人心理と社交心理との差を見るべしです。

こうした社会心理、社交心理、対他意識というものが吾人自身の自我の中の大部分を占めているが故に、本当の吾人自身の方を特に言語表現としても区別したくなるのは当然です。

世間人が迷いか？
野狐禪[やこぜん]が迷いか？

此の区別から見ると、例の『迷いが常態である』という Existenz の解釈から考えて面白い対立が生じて来ます。即ち、『おのれ自身を忘れ、世間的になり、標準心理の中だけを遊び廻り、自分自身の頭の中が社会そのものの考え方だけになってしまう』という、所謂世間化した意識が迷いであるか、或いはそれとは反対に、ドイツ人がよく Träumer という奴、即ち『世間知らずの、お坊ちゃんのひとりきりで世間に通用しない勝手な考えばかりを考えている男』、或いは野狐禪、ひとり好がり、変屈、偏狭などというのが迷いであるか、これがちょっと面白い問題です。少くとも此の両方の傾向がはっきりと分れていて、両方とも相手のことを悪くいうというのが非常に面白い。

さっき挙げた sich selbst angehörig というのは『良く』云ったことばですが、それと反対に、求心的な局面を滑稽化したり悪く云ったりする時にも矢張り再帰的な表現が試みられる：

In einem Hain, der einer Wilnis gleich,
Und nah am Meer ein kleines Landgut grenzte,
Ging Phantias mit seinem Gram und sich
Allein umher. (Wieland: Musarion, I.)

海辺に近くささやかな荘園に境する
草蓬々の荒野にも似た木立の中を
ファニアスはただひとり快々と
彷徨っていた。

『ただひとり』とは言っても。本当にただ一人では前にも述べた通り人間は到底堪えられるものではない。本当は『自分自身と二人きり』であって、その二人の間に何かこう話合いをつけたり、よく云って聞かせたり、一度よく訊きただして見たり、意見を交換して見たりする用事がなければ、すぐまた例の退屈という局面にぶつかってしまう。

此の見地から考えると、禁固とか、営倉とか、とにかく人間を一人きりにしてしまうということは、まだ自我と自我との間に大した用談のない子供とか女とか世間的な人間

とか云ったような種類の者には、むしろ死刑よりも残酷な刑であると云わなければなりません。それに反して、多少主観の豊富になった人間にとっては、一人きりでほったらかされると云う事はそう大した苦痛ではない。時には幸福とすらも感ぜられるでしょう。-----それとは逆に、たとえば子供を教育するような時には、その子供を多少『深み』のある、底力のある子にしようと思ったら、即ちたとえば思想家とか、腹のある政治家とか、うんとずるい商人とか、或いは大悪人とか大聖人とかに仕立て上げようと思ったら、なる可く **sich selbst überlassen**, 即ち『ひとりきりで放ったらかしておく』のがいいでしょう。時には何処か暗いところへ入れて閉じ込めておいたり、遊び友達をなくしてしまったり、おもちゃを取り上げたり、どなりつけて手も足も出なく仕向けたり.....可哀そうだけれども、そういう風にしてコジらせ屈折させなければ本当に骨のある人間は出来ないだろうと思えますね。

求心的局面の重要なものとしては、まだ其の他に『自縮』とでも名付けるべき現象があります。たとえば **in sich selbst zurückgehen** (内省、内観する) **in sich selbst gekehrt sein**, **in sich selbst versunken sein**, **sich in sich selbst zurückziehen**, 等の云い回しです。

Der Musikus müsse immer in sich selbst gekehrt sein,
sein Innerstes ausbilden, um es nach außen zu wenden.
(Goethe : Wilhelm Meisters Wanderjahre, II . 9.)

曰く、作曲家は常に己れ自身に心眼を向け、己が内奥を完成して以て之れを外部に向って表現せざる可からずと。

作曲家はなるほどそうでしょう。作曲家の Existenz は、いわゆる野孤禅として、いわゆる Träumer としてしか考えられない。『一人だけで好い気持ちになれる』人間でなければ作曲家には絶対になれない。-----文学者だってそうです、いくら世間的な苦勞を通過したって本当の文学者にはなれない。自分自身の悩みと、自分自身の『好い気持ち』がなければ、真の意味に於ける作家にはなれない。(すぐ間に合って一寸世間へ顔出しの出来る作家になるにはむしろその反対が必要で、なる可く野孤禅を止して、世間に通ることを世間に通ることをとねらった方が実用的ですが)

芸術ばかりではない、倫理的な事柄だってその通りです:

Von der Religiosität Luthers her war der eigenste Grundzug der deutschen Denkart die Innerlichkeit des moralischen Bewußtseins, gleichsam die Rückkehr der religiösen Bewegung in sich selbst, die Überzeugung, daß in der Gesinnung und nicht in dem äußeren Werk der höchste Wert des Lebens gelegen sei.

(Dilthey : Der Erlebnis und die Dichtung)

ルッテルの宗教思想以来、ドイツ思想の最も独自なる基調をなすに至ったのは道義意識の内燃性、謂わば宗教運動の求心的傾向、即ち『人生の最高の価値は意思にあるのであって、決して外形的所作にあるのではない』と云う此の信念である。

勿論此の自主的再帰性、即ち自我が自我の方に向いてしまうと云う求心的再帰性には、直ちにその『迷い』の危険が伴って来ることは事実で、一個人の性格に関して云えば野孤禅とか世間知らずとか自から得々としている凡ての迷いがこれに境していますし、その時々心理に就て云うならば『ぼやける』とか『つくねんとしている』とか、 **Grillen fangen** とか、 **Träumerei** とか、その他あらゆる気違いじみた局面が控えています。ぼんやりしていることを **Zerstreuung** と云って、『気が散じている』と云うのは、これは『社会人的立場』から見た批評であって、『自己』から云えばむしろ反対で、むしろ **Konzentriertheit**, **Konzentration** と云う可きです。-----つまり自己が、対内じこと、対外自己との二つあるわけなのだから、どっちの立場から見て『ぼんやり』しているのか、

それは立場によって全然逆になって来る。たとえば：

Donati, der bis dahin noch immer in sich versunken war,
schien erst hier plötzlich zu besinnen.
(Eichendorff : Das Marmorbild.)

その時までまだ相変らずぼかんと物思いに耽っていた
ドナーティーは、この時初めて我にかえったらしかった。

此の文例で、どちらの自我が『真の自我』と解釈されているかを考えて見ると、甚だ面白い。in sich versunken の方の sich と、sich besinnen (或いは zu sich kommen) の方の sich とは全然別物でなければならない筈でしょう。前者は、『対内的自我』で、後者は『対外的自我』です。此の文全体の趣旨が、とにかく『ぼんやりしている』ということゆえ、とにかく世間的な立場にあって口を利いている場合のことですから、真の自己とも云う可き対内的自己の方は多少継子扱いされたような口吻になっている。だいいち日本語の『我にかえる』とか、ドイツ語の zu sich kommen とかいうのが、どちらも『対外的自己』の方を真の自己と決めてしまった世間的な立場の用語です。-----もし真の自己の立場から表現するのであったならば、ぼんやりしていた男がハッとわれに帰った、などと云うのは反対で、本当は『せっかく集中していた自己がパッと分散してしまった』とでも云わなければならない所でしょう。

此の稿の当初から問題にしている『二部分となって対立する二つの自我は、とにかく対立だけが表現に必要なのであって、その部分部分はその時々でどちらにでも勝手にこじつけてしまうものだ』と云う一般法則は、-----また、そのどちらの自我に陥入るのが迷いであって、そちらの自我が真の自我であるかという問題にしても、そう簡単には片づけられませんまい。ただ一つ明らかなのは、とにかくそのどちらかの迷いに陥入らずには existieren することはできない、その両者の間を絶えずふらふらと揺らぐ如く仕組まれているのが、これが Existenz というものの『仕掛け』、『仕組み』(Struktur)であり、筋書きであり、からくりであるという此の事実です。

言語は、言語に特有なる具を以て此の Existenz の『仕組み』を解釈する傾向をもっている。そしてドイツ語の sich ならびに再帰語法一般が、此の existenzielle Struktur を解釈する最も特徴的な具である、これが此の長々しい本稿を一貫している主張点であることにもう大抵おわかりになった事と思います。

扱て、前掲の二三の文例に現れて来た in sich zurückgehen, in sich versunken 等に於ける『空間象徴』(Raumsymbolik)の問題ですが、これらには、明らかに空間を占める事物の或種の動きが考えられている。しかも或種の『求心的』(zentripetal)な、収縮的な運動の表象に訴えられている。この Raumsymbolik は、これらの表現を真に現象として把握する上にかなり重大だろうと思われまますから、ちょっと序でに説明しておきます。

求心的運動の ein-

日本語にも、たとえば『すっかり滅り込む』とか、『すっかり考え込む』とか云って、『込む』(ein-, in)という運動を以て求心的な運動を表現する意味形態がある。また、『眠り込む』等の込むは einschlafen の ein- と全然同じだから面白い。空間的運動でないものを空間的に表現するのは凡ゆる言語に共通な現象ですが、日本語も期せずして一致しているなんてのは考えて見るとなかなか面白い。

此の ein- を、仮に求心的 ein-と呼ぶならば、此の意味形態は、日本語に於けるよりはドイツ語に於ける方が、ずっと発達をとげています。たとえば『凍てついてコチコチになってしまった』ことを eingefroren という、『錆びついてしまった』ことを eingeroestet という-----これは必ずしも本当の錆でなくてもよろしい、たとえば声楽家などが、長い間声を出さずにいたりなどすると、さあ歌おうとしても声が eingeroestet になってしまっ

て好い声が出ない、或いはピアノ弾きでも暫く指を動かさずにいると錆つくということが起って来る、等々-----また、パンなどが固くこちこちになって了うのなども、**eingetrocknet** という、ちぢかまって小さくなってしまったらそれは **ingeschrumpft** でしょう、氷などが溶けて僅かになってしまったら **ingeschmolzen** でしょう、堂々たる建築が地震などでペシャンコになったら **eingeknickt** とか **eingestürzt** とか、或いは **in sich zusammengestürzt** とかいうでしょう、また一時威勢の好かった雑誌などが経営難のために『廃刊』になるなんてのは **eingehen** (廃刊になる) という面白いことばがある。またゲーテの **Offene Tafel** という詩の：

Doch ich sehe niemand gehn,
Sehe niemand rennen.
Suppe kocht und siedet ein,
Braten will verbrennen.

ところが誰も姿を見せぬ、
足音一つ聞こえない、
お汁はとっくに煮えつまり
肉はやんがて黒焦げだ.....

einkochen, **einsieden** の **ein-** は、要するに日本語の煮え『つまる』という『つまる』に相当します。

然らば問う、『つまる』とは何ぞや？『込む』とは何ぞや？**ein-** とは何ぞや？-----単に空間的な運動として考えるならば **ein-** は『表にあったものが、何物かの内部に向って這入り込んで行く』ことですが、それだけの考え方は此の収縮的、滅入的、求心的、減少的な **Raumsymbolik** が説明し切れない。

表にあったものが『何物か』の内部に向って這入り込んで行く-----問題の中心は、此の『何物か』が何者であるかと云う点に帰着しなければなりません。這入るのはわかったが、さて何の中へ這入るのでしょう？

解答は、**in sich zusammenstürzen** (土崩瓦壊する、ペシャンコになる)、**in sich zusammenfallen**, **in sich zusammenbrechen**, **in sich zusammenknicken** 等、沢山ある『ペシャンコ』的運動の表現を考えればわかる通り、その何物かというのは、実は主語と同一物なのです。**einstürzen** = **in sich zusammenstürzen**.

zusammen- の有する求心的、自滅的、滅入的、収縮的、崩壊的、ペシャンコの、無力化的意味形態だけでは物足りないで、なおその上に **in sich** を加えて『ペシャンコ』的潰滅をいやが上にも躍如たらしめる点にこれらの用句の面白さと **Anschaulichkeit** とがあります。問題の **ein-** は即ち **zusammen-** と意味形態的には同一物なのです。

- [1] **Der Putschversuch brach infolge mangelnder Führung bald in sich zusammen.**

叛乱の試みは指導不足の結果やがて自滅するに至った。

- [2] **Die schwache Baute aus Lehm und altem Holz stürzt beim ersten Erdbeben in sich zusammen.**

土と古材木でこさえた脆弱な建築は一寸地震でも来ればたちまちペシャンコにつぶれてしまう。

聞く所に依ると、吾人の棲家である所の此の宇宙自身も、いずれは熱のエネルギーが段々と中和してしまっていて、もはや到る処がすべて同一の熱度になってしまい、その結果として凡ゆる運動、凡ゆる作用が停止してしまう時が来るだろう、という科学上の説があります。つまり宇宙の自滅です。**Das Weltall bricht in sich selbst zusammen** 或いは **Alle Bewegungen gehen ein** (凡ゆる運動が自滅する) です。斯うした、熱の平均化のことを

Entropie と申しますが、此の Entropie と云うのはギリシャ語で、最初の en- と云う前綴は丁度ドイツ語の ein にあたり、次の tropie は、trepo 即ちドイツ語の wenden (向ける、向く)にあたります。つまり Entropie は直訳すれば『内向』、『内転』で、もっと好い日本語にするならば『自滅』、『求心運動』、『滅入』です。-----梵語の涅槃(Nirvana)を想わせるものがあります。Nirvana も消えるという意味だと云います。Existenz の求心的傾向としては是非触れなければならない概念ではありますが、只今はまあ言葉に触れるだけにとどめましょう。(涅槃の語義に就ては多くの説ある由、たとえば Schopenhauer の Die Welt als Wille und Vorstellung [Ergänzung]の Viertes Buch, Kapitel 41 の最後参照。)

とにかくまあ ein- や in sich には、斯うした自滅的・求心的な意味形態があつて、しかもそれが必ずしもドイツ語だけではないということがおわかりになった事と思います。つまり『空間的な表象』としての ein や in の象徴的な一応用です。

こういう空間的な考え方があるから、そこで in sich zurückgehen とか in sich versinken とか云ったような再帰的表現には、内面化、深刻化、充実、反省等の好い意味以外に、やゝともすると『滅り込む、収縮する』等の悪い意味が生じて来るので、それがまた『主観化』とか、野孤禅主義とか、斯うした再帰的傾向に付きまとう世人の非難をごく無邪気に表現しています。-----とにかく Existenz とは、いわゆる Leben, すなわち活動、躍動、すなわち動相なのですから、その反対の『活動性の欠如』、寂滅、涅槃、反省、収縮、凝固等、あらゆる求心的な局面に対しては、すでにそれが外部から見て不景気であると云うだけの理由を以てしても、反感を抱かざるを得なくなるというのが自然でしょう。少くとも 元気の好い、遠心的な人間はです。此の点は東洋人と西洋人とで少しちがいます。求心中の求心たる涅槃の如きものが理想となった印度が Existenz に於て遅れ、遠心性を有し、動的不安定性に恵まれている西洋人種が近世文明の尖端に立って革命又革命の Existenz を existieren するに至ったことを彼是鑑考照合するならば、けだし再帰の二側たる求心遠心の関係が非常に明らかになりましょう。

本講の Thema 全体が、この『求心的』という非常に空間的な Symbolik を基礎にしていますから、最後に斯うした Raumsymbolik のドイツ人独特の表象を一つ二つ紹介しておくことにします。

Der Schmied behauptete sogar, der Schneider sei klein geblieben, weil die Mutter ihn beständig in sich hineingejagt habe. Der Schneider sei eigentlich ein langer, starker Kerl, aber er habe sich in sich selber verkrochen und könne sich nun nicht mehr aus sich herausfinden.
(O. Ludwig. Aus dem Regen in die Traufe.)

殊に鍛冶屋の親父のいう事が実に口がわるい、この服屋さんは、お袋がしょっちゅうやり込めるものだから、込められて込められて到頭自分の中へ這入ったきり出て来れなくなったからこんなに小柄に仕立てあがってしまったので、元はこれでもかなり背の高い頑丈な男だったんだけど、段々自分の身体の中へもぐり込んでしまって、今じゃあもう出口がめっからなくなったのだそうである。

これは、鼻息の荒いお袋がいて、しょっちゅう尻をぶたれたりつねられたりして、二六時中家庭内では縮みあがっていなければならない服屋の噂をしている所ですが、またその男がドイツ人によくある小男で、子供ほどの身丈しかないから、その悪口を云ったものです。いったい仕立屋というやつは、座っているのが商売で、したがって弱々しい意気地のないものという Volksvorstellung がドイツでは元々からあるので、それは例の Dreiunddreißig Schneider wiegen nur sechs Pfund ! なんていう俗歌があるのでわかることですが、Otto Ludwig の Aus dem Regen in die Traufe も斯うした普通の考え方を基礎にした滑稽小説です。

鍛冶屋のおやじさんなどにこうした **Raumsymbolik** を平気で云わせているところを見ても、ドイツ人の考え方の特徴がわかるでしょう。

次のは、in ではないが、やはり面白い空間的・再帰的な考え方の例です。

Als ich noch ein Knabe war,
Sperrte man mich ein ;
Und so saß ich manches Jahr
Über mir allein,
Wie im Mutterleib.
(Goethe : Der neue Amadis)

あたしは少年だったとき
狭いところへ入れられた、
そうしてあたしは幾年か
『く』の字になって蹲[しゃが]んでた、
おなかの中の赤ん坊みたいに。

雌鶏が玉子を孵[かえ]す(所謂『抱卵する』というやつ)ときに玉子の上にもうずくまる(über den Eiern sitzen)とか、或いは机に嚙りついて書物の上に上体をかがめて『く』の字なりになる(über den Büchern sitzen)とか、従ってまた、何かの仕事に夢中になって寝食を忘れる(über der Arbeit sitzen)とかいうのは、各々しゃがみ蹲踞する時の土台になる物体がはっきりしていますが、再帰的になって über sich selbst sitzen となると、殆んど『求心的』という意味形態だけしか残らない。従ってその意味形態に付き纏う或種の濃厚な雰囲気と色彩と気持の表現だけが読者の語感に迫ることになってきます。再帰的に言い換えるならば、つまり『自分自身を孵す』のですな。sich selbst ausbrüten です。

故に、この最後の例は、その前の服屋さんのとはちがって、直接には空間的に表現したのですが、間接にはやはり本講全体の Thema にした趣旨と同じような Existenz お求心的再帰局面を表現しようとしているのです。必ずしも二三年刑務所へ投げ込まれたために個性の陰影が深くなって来る等の場合のみではない、そもそも瞑想とか思索とか云うものは凡て斯うした求心的再帰運動の局面に在る Existenz と観る可きではないかと思えます。

第五講

今度は『意識』という方面から見た再帰語法の意義を考察してみましょう。

勿論、前講までに問題にした諸種の Existenz の局面は、一つとして意識に関係しないものはありません。否 Existenz その者が直ちに以て Bewußtsein と同義なのではありませんけれども、これまでは、謂わば『意識の諸種の局面』に注意を向けたので、こんどはそれらの局面の基礎を成す『そもそも意識なるもの』について見て見ようというのです。

Existenz 又は意識の或種の局面を、再帰語法によって、即ち自我を二度言い換えることによって表現するのが白哲人種の『俗間哲学』(Volksmetaphysik)であるとするならば、左様な表現に最も相応しい現象は、此の『そもそも意識なるもの』でなければなりません。否、我々の現在の気持ちで断ずるならば、むしろ『意識という現象そのものは、再帰的にしか言い現しようがないのではあるまいか』とすらも云いたいくらいです。否、西洋哲学は百尺竿頭さらに一步を進めて、単に意識の『表現』のみならず、意識の『解釈』、意識の『構造』そのものをすらも再帰的に造って行こうとする傾向を示している。こうなって来ると再帰ということはもはや単なる語学上の問題ではない、一度根本的にテーマとして考えて見る必要のある、哲学上の一大問題だといわなければなりません。

再帰語法と
Immanenz

早い話が、『私はそれを百も二百も承知している』即ち『私はそれをよく意識している』ということをして **Ich bin mir dessen wohl bewußt** とか **Ich bin mir darüber völlig klar** とか **Ich bin mir darüber völlig im klaren** とか云いますが、これらに共通な **ich.....mir.....** と云う構造がわれわれの言語意識にはおっと物珍らしい印象を与えます。我々ならば、或物『を』見る、とか、或人『を』嘲る、とか云った様な場合と同じように、他働詞的な言い廻しをして『或事を意識する』と云うのが極く自然なように考えられるのですが、ドイツ人はひどく手の込んだ組み合わせをして『私が私に **bewußt** である』という構造を取らないと気持が満足しないらしい。此の『そうしないと気持が満足しない』という事は、何等かの事実を事実に証拠立てているに相違ありません。事実ほどよく事実を証するものはありませんから。

Ich bin mir bewußt というと、これは自働的 です。自働的 というのは、それ自身何等複雑な機構を有しない元来の自働詞 (**ich sitze, ich schlafe**) ばかりではなく、受身の形も、再帰の形も、共に含めての意味です。----- すると、『**自働とは何ぞや?**』ということ を改めて考えて見なければなりません。自働 というのは、動詞によって意味されている動作が、その動作の主体となる者(即ち主語)の占むる域内に於て終始し、それ以外の域にある他の物をその動作の不可欠なる一要素としては要求しないと云う事を意味します。即ち『**自主的**』動作、『**自律的**』動作です。これを哲学の用語でいうならば **immanent** (内在的、又は：域内終始的)な動きです。

ちょっと此の **immanent** という厄介な語について註を加えておきます。この一語は実 一言不可説とと申しますか不立文字と申しますか、実に西洋思想の真言とでもい べき語で、この語の応用法が本当にわかったならば、ドイツ哲学の真髓はそれ でつかめたと云って好いでしょう。私も実は此のことばが五遍も六遍もわかった。 というのは、最初わかっていたのは浅墓なわかり方だったと見えて、その後別な方面に耽っていると、 こんどはまたそれより一段深く広くわかった、と云ったように、何度もわかり直した。 それと同時に、**immanent** という語は色んな方面に乱用されるから、別に こういう時 だけに用いるという決まった習慣はちともないのだ、ということもわかって来た。

極くわかり易い例で云うならば、たとえば文芸批評などで **immanente Kritik** なんてこ とを云う。つまり『域内終始的批判』です。どんな批判かという と、たとえば批評家が新聞小説を批評するとしますと、『おれは大衆物はきらいだ』という立場から、一言の もとに『こんな俗作品はだめだ』とか『ここはこう変えた方が好い』とか云って、原作者の立場を認めないで、原作者の意図しなかつたような方面にはみ出すような事を云い 出すとすれば、それは其の作品の本質から見て **transzendente Kritik** (脱域的批判)です。 適切な例でいうならば、左翼思想の人たちが昔の文豪を批評して、たとえばゲーテはブールジョア根性の権化だとか、プロレタリア精神がないとかいうとすれば、それは、唯 物史観的態度を説明するための材料にゲーテを持ち出したとすればそれでよろしいが、ゲーテそのものの研究として見るならば甚だ **transzendente Kritik** です。-----**immanente Kritik** というのはその反対で、たとえば、大衆物を頭っから認めない批評家でも、一つ の大衆物をつかまえて、**immanent** に、即ち『大衆物という観念の中だけに終始しつつ』 批評することもできるでしょう。即ち、仮に批評家自身が作者の立場に立って見て、そ して大衆物を作るとしたならどうか、という気持から出立して、しかもその与件の域内 だけに終始しつつ、そんなら茲はこうした方が好い、あすこは大衆物としてはいけな い.....といったようにひひょうをするのです。『然しおれは本当は大衆物なんか蟲が好か ない』と云ったような **transzendent** な方面は、ぶっこわしになるから、仮に問題にしない でおくのです。**immanent** (域内終始的)は **transzendent** (脱域的)の逆です。

以上は **immanent, transzendent** という語の一つの特殊な応用に過ぎませんが、これが 哲学の方ではどうした意味に用いられるかという事を簡単に述べて置きましょう。

話は先ずカントの認識論から述べることになりますが、カント哲学の要旨を荒っぽく 約言するとすれば斯ういうことになりましょう：『真諦[しんたい]を探るとか事実を究 めるとか云うが、世の中にはただ多くの”現象”があるのみであって、現象の裏に隠れ ているといったような真諦とか物自体とかいったようなものは、あるとも云えるし無い

とも云える、私はよくは知らない。Ding an sich (物それ自体)なんてのはちょっと変な迷信である。そんなものがあるかも知れないが、なくたって一向差支えない。-----”現象”にして始めて経験の対象たることができる。われわれの認識は単に現象の範囲を出でないものである。即ち *erscheinungsimmanent* (現象終始的)である。我々の認識が *immanent* なる経験の域を一步でも彼岸にはみ出して *transzendent* (本領脱出的)な理屈を云えば、それはもはや真偽の詮索の埒外にはみ出したのであって、本当というのも嘘というのも、両方とも正しく、両方ともまちがっている。物自体を擱んだ認識なんてものはあり得ない。』-----これがカントの批判哲学です。

ところが、このカントの *immanent* な傾向を極端に考えて行くというと、人間の主観に受け入れられる現象の総計だけが世界であって、経験し得べきもの、即ち我々の頭に触れて来るもの、或いは触れて来る可能性のあるものの圈内のみが実在世界だということになる。否、もっとひどく考えると (Fichte)、こうして世界に生を得ているという此の人生という現象総体がいわば一種の自主自律的現象、自動詞的現象、或いは再帰的現象だということになる。単に自働的というと、我々自身の積極行動がちっとも表現されないから、Fichte はこれを再帰的に考えて、『自我が自我自身を.....云々する』という風に解釈し、この『云々』を称して以て *Tathandlung* と名づけ、これを以て彼の哲学の中心に据えています。

これ以外は少し複雑になるから省きますが、ドイツ哲学はかくの如くにしてカント以来遂に *immanent* 的世界解釈に向って方向を取り、従って再帰的自働を以て凡ての哲学の *Method*e にするに至りました。Hegel の考えた自主発展的世界史観もまた此の方向を出でていません。Hegel の体系に於ける歴史というのは、要するに彼の所謂 *Das absolute Geist* (即ちゲーテの *Faust* に出て来る *Erdegeist* とほぼ同じ概念)なるものの自主自律的、自働詞的、再帰的、域内終始的『繰りひろげ』(*Entwicklung*)にすぎません。最近の Heidegger 哲学に於ける *Sein und Zeit* の解釈の如きは、そうした *Immanenz* をなおも深く押し進めたもので、いわば *Daseins-Immanenz* そのものを以て直ちに実在学の基礎としてしまったものです。今までのドイツ哲学がかなり *immanent* であったところへ持って来て、Heidegger は、それでもまだ十分に *immanent* でないとして、遂に『そもそも *Immanenz* なるもの』という学問を立ててしまったかの感があります。

自働詞と他動詞との差を論じているうちに、*immanent* という一語のために大分話が込み入ってしまいましたが、自働詞として見た再帰語法の根本の意義を探るためには、決して無駄な努力ではなかったらうと思います。こうした方面に想いを致してはじめて、ドイツ人というものの (広く云えば印欧民族の)精神の奥を流れる底流を諦視することができ、且つまたその底流が天然自然に発してはドイツ語の再帰語法となり、人工的に発してはカント、フィヒテ、ヘーゲル、ハイデッゲルの哲学となったわけが首肯されるのです。

そこでまた話を元へ戻しますが、『意識』という状態を、日本語の如くに他働的にではなく、自働的に、再帰的に、即ち *immanent* に考えるという現象は、人間の意識が発達して、主観強化的傾向の一段階に到達したことの証左であるというも過言ではありません。再帰というのは、平たく云えばつまり『独り角力を取っている状態』のことで、人間世界の総体が『人間自身の独り角力』のように見え初めるという事が人間意識の一発達を意味するということ、ちょっと謎のように聞こえるかも知れませんが、主観と自我意識が鞏[きょう]化されて自主自立の本能に目覚めた場合に、かくの如き *immanent* な傾向に入るのが必趨の勢であるということは、現にドイツ哲学が之れを証しており、且つ広くは亦ヨーロッパ文化全体がこれを実証しています。搬般の必然性を精神現象として学理的に根拠づけたのが例の Hegel の *Phänomenologie des Geistes* です。

では、再帰的な考え方によって、わかり易く此の『意識』という現象を理屈にほごして見るとすれば、どんなことになるでしょう?-----其処には、当然二つの自我を設けないでは考えられない不思議な関係が支配していることに気がつきます。謂わば、二人の人間がいて、一人の人間は一生懸命に何かやっている、それを他の一人が側に立って見物している、といった関係が、同一人の頭の中に生じている、この現象がとりも直さず意識です。しばらく前に用いたことのある例の『現実我と理想我』という区別をまたも

う一度持ち出して申しますならば、単に現実我が存在するばかりでなく、それと『ダブった』理想我といったようなものが、たとえば鏡のように、多少の距離を置いて、その現実我の姿をその現実我自身に向って照らし出して見せていると云ったような関係になります。

これは、只今までも度々問題にして来た『屈折現象』の一種ですが、既に述べて来た他の局面と違う点は、こんどの『意識』なる現象の場合に於ては、その屈折なるものが何等『運動』の如き性質を有せず、ただいま述べた『鏡』の譬でも明瞭なるごとく、謂わば静かな、単なる光学的現象であるという点です。

Zu lange waren die Väter von der Gewalt des ungerüttelten Bestehenden geknechtet worden, als daß die Nachkommen nicht an den bitteren Erfahrungen hätten lernen sollen, sich zu fühlen.

(Max Stirner : Der Einzige und sein Eigentum. II.)

祖先達は余りにも長らく厳存の既成制度の威圧の下に隷仕した、それ故その後裔がこれらの苦き経験の結果として自覚するに至ったのは理の当然である。

此の *sich fühlen* というのは、只今までに述べた *immanent* な傾向、自立的主観の確立としての意識ということを実例によって註釈したものです。日本語にも近頃自覚ということがちょいちょい云われますが、思想的背景と再帰代名詞のこうしたアイマイな機能とに慣れないというと、『自分を感じる』というのは一たい何のことだか、漠然としていてちっともわからないに違いありません。

こうした用法がまず最も深く *Immanenz* としての意識の表現に当たっていて、思想的にも最も興味が深いのですが、次に、少し変った方面へ移って、意識的方面と無意識的方面とが相戦っている局面をしらべて来ましょう。そうすると問題が非常に微妙になると同時に、一面また、意識というものの正体がはっきりして来ます。

Dann strich sich die Decke des Sohnes glatt, aber schon mit achtlosen Händen, gleichsam nur um sich selbst ein wenig konventionelle Mütterlichkeit vorzuspielen, und ging.

(Franz Werfel : Kleinere Verhältnisse)

そうしたのち、彼女は息子のねているベッドの掛け布団の上をそっと撫でて皺をのぼすようなことをしたが、その手つきはもう何となく身が入っていなかった。いわばまあ世間並の母性をわざわざ意識的にやって見て安心すると云ったように。そして彼女は部屋を立ち去った。

以上の訳は勿論訳ではなくて、説明が半分だから少しくどいかも知れませんが、此の場合の母親の意識的・無意識な変なそぶりは大体おわかりになる事と思います。

抑も人間に意識という変なものが備わっていると云う事は、一面非常に有難いようであって、また他面に於ては甚だ有難くないことがある。というのは、よくある意識生活の一局面ですが、意識するということは甚だ自分にとって都合がわるく、目をつぶって通った方が気が楽な場合があるからです。『自分自身に対して頬かぶりをして通る』方が得策なことが起って来ます-----意識というのは、つまり、前に述べたように、我々自身の鼻の先に鏡が置いてあるのと同じ関係にあるものです。或種の場合には自分のやっている事が自分自身の眼に映ずるのは甚だ困ることが起って来る。其処で、自分自身の意識を瞞着したり、自分には一寸内緒にして置いたり、自分自身の蔭にかくれてこっそりとやってしまったり、その他意識の明鏡を曇らせることによって現実我の意図を貫徹しようとする局面が生じて来ます。-----只今あげた母親の挙動の描写などがその局面の

なかなか微妙複雑な場合で、これは、自分が平素あまりかまわなかった子供が病気になるって眠っているところへ母親がやって来て、寝息をうかがって見たが、別に変った事もなく、すやすやと眠っているらしいので、安心したような、すまないような、何となく物足りない中途半端な気持のまゝで、また部屋を出て行ってしまふ所の描写ですが、介抱したいにも介抱する事がないものだから、彼女はベッドの蒲団の上を撫でて皺を延ばしてやる。蒲団の皺を延ばしたからと云って病気が楽になるという話はまだ聞いたこともないが、とにかく何かしないと自分の気持がすまないものだからそうするわけです。けれども、そうしながらも、それは単に自分が自分自身に対して演出して見せる芝居に過ぎないのだという『意識』があるから、彼女は多少恥かしくもあって、そう大袈裟にはやり切れない。やりかけた途中で、あいまいに胡麻化してしまう。だいいち、皺を撫でたからと云って病気に何の関係もないということは『薄々知っている』ものだから、勿論真面目に撫ではしない。では全然撫でる必要はないではないかと云えば、それはまあそうです、そこがその.....面白いところです。要するに人間という奴は、意識という鏡を突きつけられていながら、格別突きつけられ甲斐もなく、実に齟齬矛盾そのものの如き行動に出でる動物で、時には現在ありありと鼻の先に見えている事すらも強いて見まいとする。『意識という浄玻璃[じょうはり]』としての理想我に対して、『無意識な塊』としての現実我は常に犯罪者の警察に対するが如く逃げかくれしていると思つてよろしい。どんなに意識の明瞭な、どんなに頭の好い人間でもそうです。否、意識が発達して凡てを克明に反射して来れば来るほど、即ち文明人になればなるほど、不透明な現実我の方はますます甚だしく暗にもぐり、地下に隠れ、ますます甚だしく犯人意識が発達して来ると云うも過言ではありません。

茲で丁度好い機会ですから『意識』という現象を再帰哲学的に定義すると、こういう風に考えられます：『意識とは、とにかく吾人自身の眼の前に置かれた、どうしても取り除くことのできない宿命的な鏡の如きものである。自分自身が反射屈折して、自分自身が欲すると欲せざるとに拘らず、自分自身に向つて帰つて来る現象である。』

鏡の例を幸いに、もう一段飛躍して面白く云うならば、『謂わば自分自身が逃れ方なく自分自身に突きつけられているかたちである』とも云えましょう。

また Heidegger の思想を持ち出していうならば、意識という現象だけではなく、そもそも人間、人生、自我というのが、Heidegger の用語で云うと、われわれが、われわれ自身の現境 (da) の真只中に向つて『投げつけられている』(geworfen) かたちなのだそうです。(この『かたち』(相)のことを Heidegger は Sein という用語で云い表わします。)故に、私が只今述べた、『突きつけられている』という変な形容は、この Heidegger の Geworfensein の一種だと思つて頂きたい。("Sein und Zeit" の 135 頁) 変な形容かも知れませんが、再帰的な考え方に這入り込んでしまった西洋哲学としては、当然こうした解釈に到達しなければならなかったのではありますまいか。また、再帰という考え方の形態を考えてはじめてこうした哲学の真言宗の一見チンプンカンの如き妙な術語が納得されるのではありますまいか？

前にあげた事例をなおはっきりさせるために、なお二三の例を付け加えて参考に供して置きます。

(1) Selbstvorwürfe, ja sogar eine Art von Reue brachen in ihrer Seele auf, Wallungen, die ihr nicht neu waren, die sie aber bisher immer mit glaubwürdigen Ausreden vor sich selber vertuscht hatte. Fr. Werfel: Kleinere Verhältnisse.

自責の念、いな、或種の後悔の念が彼女の心に捲き起つた。こうした気持は決して今日が初めてではなかったが、今までは、そんな気持が起つても、なにかまことしやかな遁口上をめぐって、われとわが良心に対し揉み消し運動をして来たのである。

(2) Durch die menschenleeren Gassen ging er langsam dahin, immer wie einem übermächtigen Zwange gehorchend, doch mit widerstrebendem Gemüt. Was er dort wollte, wohin es zog, gestand er sich selbst nicht ein. (Heysse: Nino und Maso)

かれは、依然として何か圧倒的な迫力に従うものの如くに、然し不承不承な足取りで、人通りも稀な街路を徐々に彼方に向かって歩いて行くのであった。かくして引かれて行く行く先に於て自分は何をしようとしているのか？それは自分自身にも告白しなかったのである。

Er weiß, was
er will 等に就て

なお意識の強さと、自信の強さ、確実さ等を表現する形式として、いわゆる再帰的な語法ではありませんが、極く普通の云い廻しがあるのには注目を要します。それは、たとえば：Er weiß, was er will.

Er weiß, was er sagt.

Er weiß, was er tut.

Er weiß, was er weiß.

Ich weiß schon, was ich zu antworten habe.

Ich weiß, was ich in dir besitze.

その他、其の場合場合で作って行く Ich weiß, was..... という構造です。これらに共通な内容は、すべて『意識の明白さ』という一点に尽きますつまり日本語の表現を求めれば、『考えるところがあって云々する』、『思う所があって云々する』、『それと知って云々する.....』、『凡てを承知の上で云々する.....』、『意識して云々する.....』ことです。即ち、決して無我夢中でたわいもなくやっているのではなくて、気はたしかである、自信があってやっているのだ、思いを其処に致した上での行動である、充分責任が取れる、子供じゃない、ということです。だから、その反対に、『何も知らずにやっている、正気の沙汰ではない、どうかしている、思わざるも甚だしい、軽率だ』と云ったような時には、Du weißt nicht, was du tust! とか Er weiß nicht, was er will! と云ったようなことを云います。つまり、さっき述べた意識の鏡の比喻で云うならば、鏡に依る屈折が充分であるか不充分であるか、即ち再帰性の深度幅員が茲では問題になっているわけです。

キリストが人々に迫害された上、いよいよ刑場に引き出されて磔刑に処せられようとしたとき、キリストは何と云ったか？かれはそれらの凶暴なる人たちを見渡しながら：

Vater, vergib ihnen, denn sie wissen nicht, was sie tun. (ルカ伝、23, 34)

と云ったそうです。邦訳のバイブルでは『父よ、かれらを赦したまえ。その為す所を知らざればなり』と訳してありますが、この『そのなすところを知らざればなり』という訳語は、訳者は多分わかっている訳したものだとは思いますが、日本語の表現としては、ややともすると『どうしていいかわからない、途方に暮れる』といったような意味の『なすところを知らず』という成句が既に存在する関係上、ともするとそうした余韻がちよっとひびくように思われるのは、はたして私だけの錯覚でしょうか？少なくとも『なすところを知らず』は直訳にすぎて、意識の屈折性の貧弱な東洋人に読ませるバイブルとしては徹底しない感がします。『おまえたちは何も知らずにわしを苛めているのだ、苛められているわしよりは、本当は苛めているおまえたちの方がずっと可哀想な人間なのだ、後でつくづく反省して見たならば、すなわちもう少し『人ごころ』がついたならば恐らくは自責の念にさいなまれるだろうから.....』と云ったような、慈父の愛子に対するが如き寛大なる恕[ゆる]しの言葉ですから、そのつもりで味わう必要があります。邦訳も、そのつもりで、誤解のないように読めばまあそれでも好いわけです。

そのつもりで此の訳語の『その為すところを知らざればなり』を味わって見ると、なるほど、直訳とは云いながら、なかなか考えて訳してあるような気もしないことはありません。

早速この『なるほど、なかなか考えて訳してある！』というのをドイツ語に訳すると：

Nun ja freilich, der Übersetzer weiß, was er schreibt !

と云ったような事になるでしょう。

意識の進化と
Existenz の深化

更に進んで an sich, in sich, für sich 等の哲学上の用語まで説明するつもりでありましたが、稿が予定以上に延びましたから、これらは他日の機会にゆずり、最後に、われわれ日本人（或いは東洋人一般）の覚悟といったような事をのべて此の稿を一先ず完結させたいと思います。

けれども、再帰哲学の結論と云い、またわれわれの西洋人に就て学ぶべき方向といい、それらの一般論は既に幾度も随所に述べて来ましたから、こうした雑誌の框内に於て述べ得ることとしては、まず大体今までのところで充分なような気持もします。また余白も大してありませんし、雑誌の記事は暗示性を以て生命と致しますから、今回はそれらすべての結論に代えて、多少暗示的に、ともすれば求心的に傾く『日本人意識』に対する一要求とでも云ったような事を、自作の拙い詩でもって謳って見ます。味噌がくさるかも知れませんが、一寸興が涌いたので、メートルをあげてタイプライターをたたいてみると、次のようなへんなものが出来上りましたから、多少概念的に過ぎる点は大目に見て頂くとして、とにかく御笑覧をねがうことに致します：

An den japanischen Geist

Auf ! schaff' Distanz
Dann bist du ganz.

Von dir zu dir
Wall' für und für,

Ein dumpfes Hin
Mit regem Sinn,

Ein tiefer Blick
In dich zurück,

Dann wieder hin,
Bleib' nimmer drin

Bei dir zu Haus,
Zieh' stets hinuas,

Hinaus zu dir,
Kurz: existier' ! (*Nicht vegetier* !)

Denn dies "hinaus"
Ist dein Zuhause

Und dieses "zu",
Das bist ja du.

Auf ! schaff' Distanz
Und Diskrepanz !

Denn solch ein Tanz
Macht erst dich ganz.